英国春秋

２０１１年　秋号
ISSUE　No. 19
発行　英国日本人会

はじめに

昨夜の大嵐でドングリの実がどっさりと落ち、それらを踏みしだく靴底の感触が、本格的な秋の到来を感じさせます。庭のコスモスも桔梗も見かけによらずしっかりとしており、古人が詠んだ、野分（のわけ）の後の散々な様は見られませんでした。明治末期まで野分とよんでいた台風は、実は日本語ではないそうです。広辞苑にはギリシャ語、中国語、アラビア語起源説があり、語源未詳とあります。またある本には、ギリシャ神話でゼウスと嵐の中で闘ったチューポンのこととあり、これがトゥファンとなりタイフーンとなり、漢字に直して台風となったとあります。私は今まで日本語の台風が「Typhoon」になったとばかり思っていました。

今回の『英国春秋』秋号も多くの方々から原稿をいただきました。４ページにもわたる力作を頂いて“連載物”にするべきかと思案してみるのも楽しさの一つ。これで発行番号１９号となり、１号づつ数字が増えて行くのが又別の楽しさでもあります。会員以外からのご寄稿は、木野悍氏　　（　ライター　）
　　中西寛氏　　（　京都大学大学院法学研究科教授　）
　　野田仁氏　　（　在英日本大使館・特命全権公使　）
の方々でした。

教鞭に、公務に、研究にそして趣味にと忙しい日々をお送りの中、『英国春秋』のために時間を割いてくださった方々に心からお礼を申しあげます。　　平成２３年９月

＊　＊　も　く　じ　＊　＊　＊

はじめに		２
日本語の国際性	加藤節雄	３　－　４
英国春秋俳壇　　ラベンダー	エリオットつやこ	４
先の大戦と一外交官の経験	野田仁	５　－　８
海を渡って来た蝶	古沢いくこ	９　－　１０
英国春秋俳壇　　青葉風	クーパー矩子	１０
ジョニーの死	トロロプ礼子	１１
自然のスケール、人間のスケール	中西寛	１２　－　１３
コーンウォールの旅	田村陽子	１４　－　１６
英国春秋俳壇　　曼珠沙華	小川のり子	１６
座禅物語り	佐山菫子	１７　－　１８
何故、どれ程、そして何処まで	津久井安子	１９　－　２２
リストそして「愛の夢」	ウインター千津子	２３　－　２４
七匹のかわず	池町ルイ子	２５　－　２８
新生	バロウ典子	２９　－　３０
ヒトとトリの次世代早期教育	木野悍	３１　－　３３
旅　時と人との出会い	岡村照子	３３　－　３４
バカにつける薬	高階玲子	３５
「英国春秋あれこれ」		
ケンもホロロに断られ	小川のり子	３６　－　３７

＊　前々号、前号の目次欄で作者名、奥村光雄とあるのは岡村光雄の間違いでした。ここに謹んでお詫びし訂正いたします。

日本語の国際性

加藤節雄

先日、ハイゲートにあるティーハウスに知り合いの日本人とお茶を飲みに入った。知り合いはハイゲート在住で、小さいけれどかわいい感じのティーハウスがあると誘われていたのだ。午後３時ごろだったろうか、店内はまだ空いており、我々は窓際の席に座った。確かに小ぢんまりとしているが、清潔感があり明るい感じだ。土地の人はハイゲートをビレッジと呼んでいるが、コッツウォルドにあるティーハウスをそのままロンドンに持って来たような店だ。

クリームティーには例によってスコーンが２つ付いてくる。

「２つは食べられないね。」

「どのくらい大きいのかしら。」

「お茶の種類もたくさんあるし、迷うね。」

注文票とペンを持って２人の会話をじっと聞いていた若いウエイトレス嬢がいきなり、

「スコーン２つをシェアしたらどうですか？」

と流暢な日本語で話しかけてきた。我々の会話は全部聞かれていたのだ。

彼女のお母さんは日本人で、最近 JET プログラムで２年間日本に住んでいたとのこと。JET プログラムは日本政府の運営する外国人英語教師招聘事業で、英国人の大学卒業生を日本の地方の中学や高校へ英語教師として派遣するプログラムで、大抵のプログラム参加者は２年間ぐらい滞在して、日本語が話せるようになって帰ってくる。

このプログラムは始まってからすでに 20 年以上経っており、かなりの英国人が参加しているので、それに連れて日本語の分かる英国人が増えていることになる。日本人の英語能力を高める目的で始まったこのプログラムがイギリス人の日本語能力を高めるのに役立っているのはやや皮肉だが、日本語だけでなく日本の文化や習慣を理解する英国人が増えるということは日本にとっても決して無駄ではないので、このプログラムは有意義と言うべきであろう。

日本語と言えば、私のワイフはかなり日本語を喋るが、かなり前になるが、地下鉄で若い日本人女性旅行者が、「イギリスの地下鉄って古臭くて汚いわね」と、誰も分からないと思ってか、日本語で悪口を言っていた。彼女はたまたまそばに居合わせたのだが、「それはそうですよ。日本の地下鉄よりも古くてもう 100 年以上前に出来たものですから」と、日本語で説明、件の日本女性たちは明らかに当惑した顔になり、驚いて開いた口が塞がらなくなってしまったそうだ。

ロンドンにおける日本語はすでに特殊語ではない。ありとあらゆる場所に日本語を理解するイギリス人がいると覚悟した方が良い。3 月の東日本大震災からそれほど経っていない時期に、私は以前からの約束で、あるロンドンのホテルのバーでウイスキー講座を開いた。生徒は 3 人ほどで片隅のテーブルに座ってモルトウイスキーを飲みながらウイスキー談義をしていた。このホテルのバーはロンドンの中でもウイスキーの種類が多く揃えられており、いろいろなタイプのウイスキーを試飲するのには好都合だからだ。

ところが、何杯かのウイスキーで緊張がほぐれた頃に、立派な身なりのイギリス紳士が突然隣りのテーブルから立ちあがり我々のテーブルに近寄り、「この度、日本は地震の被害で大変でしたね。ご同情申し上げます」と、完全な日本語で語りかけてきた。この紳士は別に「日本が大変な時にウイスキーなんか飲んで」と、我々を咎めているわけではなく、ただ単に、たまたま隣にいたのが日本人だったので、彼の同情心を伝えたかっただけだと思うが、それを聞いた我々の方は、何故か、親や先生に

隠れて何か悪いことをしている子供に様な気持ちになり、すっかり酔いがさめてしまった。

　最近は日本語を学習する英国人学生が減少気味と言われている。経済を反映して中国語を勉強する学生が増えているからだとも言われている。しかし、日本語を理解するイギリス人は決して減ってはいない。流暢には話せないまでも、言っていることは理解できるという人も含めたらかなりの数のイギリス人が日本語を理解するはずだ。言葉は文化であり、日本文化が国際的になるに連れ、日本語を理解する人も増えるのは当然と言えば当然だ。すでにイギリスでは日本語での秘密の会話は盗聴の危険ありと理解した方が良い。

英国春秋俳壇

ラベンダー

エリオット　つやこ

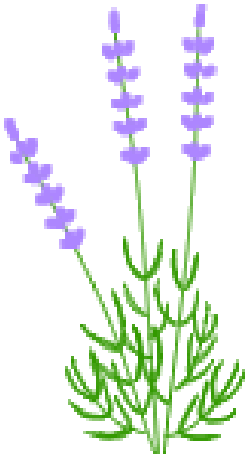
ベンチの影白く残して霜解けぬ

水仙の芽伸びゆくを見る日なた道

寒桜うすもも色の暖かさ

春陽を集めて桜ほころびし

鳥立つや雨雲到来屋根の上



木もれ日やむれて匂えりレース草

4 枚の花びらゆれてポピーかな

夏草や川走り行く雨あがり

紫の風にふかれてラベンダー

ラベンダー畝を幾つも飛び越えて

先の大戦と一外交官の経験

野田　仁

ロンドンでの勤務を始めて、間もなく一年になろうとしています。日本人会を始めとして英国に御在住の皆様からいただいております御厚情、御支援に、この場をお借りして深くお礼申し上げます。
いわゆる外交官生活を長いことしていますが、英国に勤務しますのは、今回が初めてになります。これもあって、この一年間、今さらながら新しいことをたくさん学ばせてもらっているように感じます。これにつきましても、皆様の御指導に、改めてお礼申し上げます。

夏の間に、英国でも多くの関係者が進めてきておられる先の大戦に関係する「和解」行事に、いくつか出席させていただきました。また、他にもこれまでの一年間の間に、メイリンズさんへの叙勲、ローズさんの追悼等，関係の大きな行事にも立ち会わせていただきました。戦争関係の歴史に起因する問題は、日本人の多くにとり、長きにわたって、古くて新しい面もあることがらと思います。私も、これまでの約３０年間の外交官生活において、いろいろな機会に、いろいろ形を変えつつ、この面でのさまざまな事項、「節目」に関係する経験をいただきました。今回英国でもいくつかの行事に参加させていただき、中心となって進めておられる方々、御支援、御参席の方、その他関係者から多くお話も伺い、現在主導しておられる方々はもちろん、これらの活動を始められた方、さらにそれに至るまでに多くの困難や御努力を経験された方々を含め、御関係の方皆様に、改めて深いお礼を申し上げたく存じます。私が出席させていただいた行事のみを具体的に挙げますことは、誤解を招きますおそれもありますため、一般的な言い方に留めたく思いますが、日英いずれの側の方のお進めの行事も、極めて厳かに、他方温かく、多くの困難を乗り越えて双方が現在の理解を貴重なものとして尊重されていることが強く感じられる行事で、繰り返しになりますが、ここに至る関係者の御尽力に誠に頭の下がる機会でした。また同時に、戦争の直接の経験者、被害者の方々は、既に相当の御高齢であり、亡くなられた方も多数に上り、時代の流れがここまで来たのだとも感じさせられることにもなりました。

単に個人的な経験の御披露に過ぎないものではありますが、お勧めもいただいたこともあり、以下で、私がこれまでの外交官生活の中で、この分野での仕事で直接に携わる経験をもらいましたことがらを、長くなりすぎないように、大きな事実関係を項目だけ、挙げさせていただきます。詳細につきましては、ここで紹介させていただくのは必要でも適当でもないと思いますので、避けますが、皆様の多くもそうでおられますように、戦争自体を自分自身は全く経験しなくてすんだ一日本人が、しかしその後の外交官生活でほぼ一貫して多くの時間を関係の仕事に費やしてきていることを、感じていただければ、ありがたく存じます。戦後の日本外交官はその多くが、また、実は日本人は皆、今に至るまで、具体的には個々人でさまざまとは存じますが、同様の経験をしてきていることと存じます。以下もその一例としてご覧いただければ、幸いです。古くなった記憶もありますため、多少の誤りが含まれる恐れが排除されません。それについては、私自身の覚え違いとしてお許しいただけますよう、お願いいたします。
初めに述べましたように、英国在住が初めてであること、他方この一年間には大震災のような空前の災害が発生したことなどから、この一年間に新しく学び、また従事させてもらっていることもたくさんありますが、今回は、このような新しいことと別に、いろいろな場所で長く経験してきておりますことを紹介させていただきます。

１．韓国（勤務は、１９９１～９４年でした。）
御存知のとおり、韓国との間では過去の歴史に起因する問題が多く論じられ取り扱われてきており、逆に、何らの意味でも歴史を念頭に置かずにやれる仕事はないと言ってもよいくらいと思いますが、私が勤務した期間で最も具体的な記憶になりましたことの一つは、いわゆる従軍慰安婦問題です。とても大きく取り扱われるようになり、個人的に直接には、

例えば大使館への毎週のデモが始まりました。
毎週の水曜日の昼過ぎでした。今も続いていると思います。時により違いましたが、数十名から百名くらいの方が集まっていたと思います。時期的に、私が着任して間もない時期に始まりました。私は、このデモなどに対応する担当官の一人となり、毎回、大使館の門の前に出て、要求項目が書かれた文書の受領などを行うことになりました。最初の頃は、水曜日の夕刊の社会面あたりに、小さな写真とともに、「抗議団からの声明書を受け取って頭を下げる大使館の若手職員」のような説明が付された記事が掲載されたりしていました。

もちろん、週一回のデモ対応だけをしていたわけではありません。いわゆる従軍慰安婦問題は、その後さらに広く深く取り上げられるようになり、元従軍慰安婦本人からの日本政府による聞取り、日本内部でのさらなる調査、立場の表明(官房長官の談話など)、種々の具体的な施策（お詫びの書簡、種々の事業の実施、そのための組織設置）などに続いていきます。これに伴い、これらの一部となる作業の量も、どんどん増えました。
また、他にも例えば、これは私の在勤時よりも前に始まっていましたが、旧樺太に生活していて戦後取り残された韓国の方への支援などの事業にも関わり、地方で行われるこの関係の会合に出席したりもしました。
抗議活動の激しい時には、石は飛んでいなかったかもしれませんが、大使館の建物などに生卵などがぶつけられました。高い階の窓ガラスに当たって割れた卵が、冬の寒さですぐに凍りついて洗いにくかったこと、逆に暑い時期に生卵が腐って臭かったことなどが、鮮明な記憶になって残っています。他にも、大使館前に停められた大型バスの上で、スピーカーを使って大声で要求を連呼する支援団体代表女性の声、デモ隊が天皇陛下を擬した人形を燃やす光景、「切腹」と称して自らの腹部にカミソリで傷をつけ、血を流す男性など、いろんな音声や光景が、思い出されます。

２．オランダ（１９９４～９６年）

韓国よりは仕事全体の中での比重は小さくなったかもしれませんが、ちょうど終戦５０周年を迎える時期をはさみ、御承知のとおりヨーロッパでもたいへん重大な節目にあたっていたこともあって、日本との間の問題も大きく取り上げられていったように感じました。旧蘭印（現インドネシア）で戦争中に収容所に拘束した方をめぐる歴史です。軍民合わせて収容所に入れられた方のうち、私の在勤時には６～７万名の方が御存命と伺いました。また、ここでも、いわゆる従軍慰安婦問題も含まれていました。
オランダについても強く印象に残っていますことの一つは、時期的に私が参りまして間もなくの頃から大使館に対しほぼ毎月行われるようになったデモです。戦争中の節目となった「記念日」的な日にち（例えば、「病院船の○○丸が日本軍の潜水艦によって沈められた日」など）を選んで、デモを実施していたようでした。ここでは、大使他の幹部とともに私も、代表の方と直接に話をさせてもらうことも多くありました。一番初めの会合では、双方とも強く緊張しつつ顔を合わせました。特に、先方の代表者が、「日本人と口を聞くのは戦後初めてくらいのことだ。」と述べながら口元に運ぶコーヒーカップが、手の震えでお皿の上で定まらず、カチャカチャと高い音を立てていたことが、やはり今でも耳に残っています。
当時の大使が転勤になりました際には、これら抗議を続けてきた方々が、「まずは話を聞いてもらって前進であった。」等述べつつ、送別会を開いたりしてくれました。また、その後、オランダの関係者も、戦後５０周年に際して日本が行った種々の交流事業等の対象にも含まれることになりました。在勤の期間中に相当密接にやりとりをさせてもらったこともあって、個人的には、その後日本に帰国して直接の担当からは外れた後も、これらの方が来日される際には会談したり、御存命の方とは現在でも年賀のやりとり等を続けたりしています。

なお、当時は、ここ英国でも同様に「和解」に向けた検討や対話が多く進められていたため、勉強のために、オランダから大使について意見交換のための出張でロンドンを訪れたこともありました。

３．マレーシア（１９９９～２００１年）

直接の戦場になったアジアの国の一つですので、ある程度の予想はしながら赴任しましたが、結果としてもここでも相当の経験をさせてもらいました。

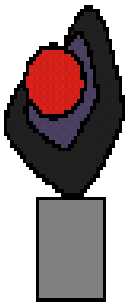
戦争から既に半世紀以上経ち、また旧マラヤでの戦争の直接の相手国はマレーシア自体というよりは英国でしたが、元々マラヤに住んでいた方々、特に中華系の方の間では、日本軍の進攻やそれに伴う地元の人々の扱いなどが、なお大きな傷跡、少なくとも記憶として残っていました。私は、戦争関係の問題を中心的な課題として中華系社会に接触したものではなく、まずは、マレーシアでも経済的に極めて大きな立場を有し、そしてこれも基に政治面でも重要な影響力を有する民族の代表として、中華系の政党や経済界、言論界等の代表との意見交換等を密接に行うことが必要であったものでしたが、それに付随して、先方各団体からは、戦時中の日本軍の行動の結果の被害などについて強く言及されることがしばしばであり、私個人だけでなく、大使以下の幹部も含めて、この趣旨に絞った対話の機会を持ったり、新聞社による会見を受けたりしたこともありました。量的には上述の韓国やオランダほどではありませんでしたが、やはりアジアの国や人と日本との関係の広さ、密接さを含めて、改めて認識させられるやりとりでした。

なお、直接に戦争が背景となった歴史によるものではないと思いますが、マレーシアでは、英国同様、日本人墓地へのお参りやお掃除などにも多く参加させてもらいました。定期的には、職住の場所でありますクアラ・ルンプールのお墓に参りましたが、国内各地に多くの日本人墓地があり、大使館では、いろいろな方のお話を伺って、把握できた墓地についての資料をまとめていました。出張でも家族での観光でも、日本人墓地が近くにある地域に出かけた際には、この資料を頼りに、必ずお参りをさせてもらいました。赤道直下の地域で、季節というものがほとんどなく、どこもいつも本当に暑いお墓参りでした。これらの中で、シンガポールの大きく立派なお墓と、ものすごいセミの声の中のサンダカン（マレーシアの中ではサバ州というボルネオ島側の町です。）のお墓が、特に印象に残っています。

４．イスラエル（２００１～０４年）

さすがに、と言ってはいけないのかもしれませんが、イスラエルでは、日本との間での大戦関係の仕事は、ここ以外の任地と比べると、限りなく小さなものでした。事前には、日本がドイツと同盟したことが何か影響を残しているものであろうかといったことも念頭に置きながら、赴任しましたが、結果としては、大戦前後の歴史の関係では、いわゆる「命のビザ」の発給の件やその後の日本でのユダヤ人の出入国の受入れの件が、美談的に感謝されることは何回もありましたが、ドイツとの関係について指摘されたことは、個人的には記憶がありません。

但し、いわゆるホロコーストについてのイスラエルの記憶の残し方は本当に強烈なものであり、また、ドイツとイスラエルとのつき合いのしかたは、当時もなお誠に機微なものであることを、絶えず勉強させられました。同時期に勤務したドイツの一外交官は、「今でも口のきき方一つ一つに細心の注意を払って仕事、生活をしている。例えば、自分の何かの発言に「ガス」という言葉が入ってきそうなときは、それが単に「ガソリン」のことであるような場合にも、何か別の言葉をさがして表現することになる。」といったことを述べていました。他国同士のお話ではありましたが、大戦関連の歴史がやはり現在まで大きな影を残しており、当事国の外交官、おそらく国民全体が、仕事やふるまいにも大きな影響を受け続けていることを、ここでも感じさせられた勤務であり、ひいては、日本の関係する歴史にも立体的な思いを馳せることとなった在勤でした。



５．米国（２００４～０７年）

ここでまた、予想以上に、これでもかというほど、過去の歴史に起因する問題への対応に従事することになりました。

再びいわゆる従軍慰安婦問題で、これをめぐって、結果として議会の下院が決議を採択する動向に、直面することになりました。決議の成立自体は、私が米国を離れた直後のことになりましたが、内容として、単純化して述べると、日本政府に対し、真相の究明、謝罪や補償、将来の世代への伝達（教育）を求める、といったことを主なものとした決議が、採択されました。

自分自身が議会との関係を直接の担当業務にしていたこと、まだ新しい記憶であること等から、明確、詳細に覚えている経験ですが、同時に、細かく書くことは、控えます。書き始めると際限なく、また直接に関わった方が多くまだ現役で御活躍中でもあるためです。このような決議は、日米関係にも、またいわゆる従軍慰安婦問題について日本が講じてきたいろいろな措置について国際的に正しい理解を得るためにも、よいものではなく、こうした決議の提案やその推進、成立は、たいへん残念なことでした。もちろん、担当者たる私には、この成立を極力回避すべく努力することが目前の任務であり、また、個人的にも決議案で求められていたことは合理的な範囲で日本が既に実施してきていたことばかりと思われたこともあって、採択されないように多く努めたつもりでした。しかし、十分ではなく、このような決議の成立を希望する関係者の動向は止まらず、紆余曲折の末に決議は成立しました。

この過程で、これに関連して私が関係の作業に払った時間は、また果てしなく大きなものになりました。一般論にとどめますが、要するに、この問題について日本政府が行ってきた事実関係の調査や究明、政府の立場の表明、お詫び、民間も含めた金銭的支払いその他の事業、学校教科書での記述といった多くの努力について、議員やその補佐官やその他の関係者に広く説明して回りました。記録をとったり計算したりはしていませんが、議会での関係の会議に出席したり、関係館員と手分けをして全下院議員事務所を訪ねて回ったりしたため、作成した書類の量とか説明などに費やした時間とかは、本当に莫大なものに上ったものと思います。

米国との間全般においてはもちろん、私が米国で勤務しました期間だけとりましても、戦争関係の歴史に起因する問題は、もちろんいわゆる従軍慰安婦問題だけではありませんが、私個人的には、この問題が大きな比重を占めました。これを通じて、戦後６０年余りを経て、この種の問題になおこれだけ力を割くことが必要な外交なのだということを、とことん再認識させられた経験になりました。この動向の中で米国下院の関係の会議で行われた一種の証言の場に三名の元従軍慰安婦が出席していましたところ、そのうち二名が、一名は韓国在勤時、もう一名はオランダ在勤時に、私又は大使館とやりとりのあった女性であったのを目にした時には、本当に無限の仕事のように感じました。

以上です。結局ずいぶん長くなってしまいましたが、各地でこのような局面、任務に参画させていただいた後に、今回の英国での勤務となり、ここでもまた関係の活動や行事に参加させていただく機会をいただきました。冒頭にも書きましたように、戦争を直接には経験せずにすんだ世代にも、またどこにいても、これだけ関係する仕事が続くこと、他方で、やはり徐々に時の流れの感じられる局面もあることを、いろんな感慨を込めつつ、繰り返させていただきます。英国でこれまでに参加させていただきました仕事の御関係の方に繰り返しお礼を申し上げ、今後も、もちろん日本政府の判断の下に、同時に個人としても、やるべきこと、できることを、続けていくものと考えています。引き続きの御指導をよろしくお願いいたします。

海を渡って来た蝶

古沢いくこ

その日のハワイの空は青く澄みわたっていた。広子は車を運転して家に帰る途中だった。車の前に蝶が飛んで来た。「ア蝶だ」横を向くといつの間にかそこにも蝶がいる、バックミラーにも写っている。まるでそこいらから湧き出るように、あたり一面蝶が舞っている。なんと不思議な幻想的な光景だろう。広子はハワイに来て４０年になるが、未だかってこんな光景に出くわした事はない。早く帰って夫の国雄に報告したい、さぞビックリする事だろうと思った。

家に帰ると夫は出かけて留守だった。海に泳ぎに行ったのだろう。夕方になると夫は毎日のように水泳に行く、それが退職してからの国雄の日課に成っていた。しかしその日はいつもより帰りが遅かった。心配に成ってきたが「７時までに帰らなかったら警察に連絡してくれ」と約束していた。国雄はほとんど飲まない人だが時々友達と水泳の帰りに食事をして来た。しかしその日は７時になっても帰って来なかった。警察に連絡するとその日、２人の水死体があるといわれた。

国雄は水泳中に心臓麻痺を起こしていたので、アっという間の出来事で苦しむ事もなかったのが、せめてもの幸いであった。国雄はよく「仏様のようなお顔をしてらっしゃる」と人に言われてきた。眉と目元がほんの少し下がり口元はいつも笑っているように見えた。性格も穏やかな人で、仕事が好きでハワイでビジネスを成功させた。その反面、家の事はまったく苦手で全て広子にまかせていた。彼女は仕事の上でも国雄のよきパートナーでした。広子は大柄で明るく世話好きな人で日本語も英語も歯切れのよい話し方をする人です。それに彼女は話上手で皆をよく笑わせました。彼女ほど気っぷの良い人はちょっといない、世界中の友達にプレゼントを送ってあげていた。空いた部屋に幾つかの箱を置き、思いついた物、どこかに出かけて「ア、これはあの人にピッタリだ」と思うと買ってそれぞれの箱に入れ一杯に成ったら送って上げていた。DVD、本、雑誌、ハワイのナッツ、チョコレート、アクセサリー、陶器、その他。彼女に送ってもらった DVD や本、雑誌には人生の生き方を示唆するものが多くあり、いきずまった時の助けに成った。又新しい世界に連れていってもらったと言う人が沢山いた。２人は弱い人にも優しくて真心のある夫婦だと評判でした。２人の子供は優秀でスコラシップをもらいニューヨークの大学に行きそこで就職したので、後を継ぐ人がいないので２年前にビジネスを売りこれから２人でゆったりと過ごす計画を建てていました。

お葬式には国雄の好きだった数種類の蘭の花のレイを作ってもらった。それをつけた顔は穏やかでいつものように笑っているようだった。友人からも幾つもの蘭のレイが届いた。広子はお焼香の時、線香の代わりに針金の上に蝶が乗っているのをお線香代わりににしてお棺にいれてもらった。広子は夫が蝶に生まれ代わり別れを告げに来て沢山の蝶と一緒に飛び去ったと信じた。

海岸に２つ並んだ椅子がある、広子とゴッドマザーが座って海を見ていた。息子がサーフィンの上にハワイの大きなバナナのような葉に丸く包んだ父の遺灰を乗せ、沖に向かって行く、その傍を娘が寄り添うように泳いでいる。２人とも高校時代はハワイ代表で何度も優勝した事のある水泳選手だった。前もって探しておいた、遠い沖の誰も来れない海底の岩場の中に、２人はそっと父の遺灰を置いた。これがハワイの原住民の水葬だった。

広子は海の見えるレストランの窓際に席を予約し、子供達と一緒に食事をしていた。何かのお祝いの時は決まってここに家族で連れ立って来ていた。テーブルには４つのグラスが

置かれ国雄の写真の傍のグラスにも、事情のよく分かっているウェイターがワインを注いだ。

蝶に成って自由に飛び回っている夫。後日、この蝶は非常にめずらしい旅をする蝶だとわかった。メキシコの森に住み、風に乗ってカナダ、北米までとぶ。あの日に限って遠い海を渡ってハワイにやって来た。その後、広子はオレンジ色のこの蝶を保護する会に入り、じぶんでも卵からさなぎにかえす手伝いをしている。

広子のもとには「ガンバレー　元気を出して！」といつもメールやカードが届いている。忘れてはいませんよ、今までどんなにお世話に成った事か、今度は私たちの出番ですよと。

英国春秋俳壇

青　葉　風

クーパー　矩子

月代や心とどかず想うのみ

我が腕に猫眠りけりやや寒う

寒月の動きたどりて留守居かな

底冷えの駅に人待ついましばし

山茶花やうたた寝上手の日曜日

ひたすらに文したたむる暮れ遅し

鳥帰る世のしがらみに我おきて

添いながら迷う暮らしや四月馬鹿

許すてふ言葉うけとむ春の情

さよならの手紙渡せし青葉風

ジョニーの死

トロロプ　礼子

貧しかった私の家族５人は、East Finchley の Council Flat に２０年近く住んでおりました。　場所は　Elmhurst Crescent で周りの住宅は中流または高級クラスが多く、場所と環境は住みやすいところでしたが高価な家を買うにも手が出ず、そこから脱出することは不可能だと諦めておりましたが、当時総理大臣であった Mrs. Thatcher のおかげで Council Flats も買うことができるようになり、やっとそこから脱出することができました。ジョニーと彼の家族を知り合ったのはそこから引越しする数年まえのことです。ジョニーは近所の flat に住んでいたジャマイカから来た黒人の、シングルマザーの子供でしたが彼には大学生のお姉さんもいたと聞きました。

ジョニーはそのころ５歳ぐらいでカトリックの学校に通学していましたが、私の通勤バスも彼と同じ方向でしたので顔見知りになりました。一度だけですがジョニーのお母さんは彼にお弁当をバス停留所まで届けていながら、バス代を渡すのを忘れてしまい、「Mummy, you forgot to give me the bus fare」と彼は泣き声でさけんでいましたが、お母さんには聞こえず家の方へ帰ってしまいましたので、そのとき彼にバス代を渡してあげました。そのころから受けた彼の印象はおとなしい子供でした。それから数年後彼が１１歳の時大事件がおきたのです。

ある土曜日の朝ジョニーはひどい火傷で病院に担ぎこまれてしまいました。私のブロックと少し離れているのでその現場はみておりませんが、話によると彼のお母さんはマーケットに買い物に出かけており留守で、朝起きた彼は寒かったのか、ファイヤプレイスに火をつけようとマッチを刷り、自分の着ていたパジャマに火をつけてしまったと想像されます。彼は火ダルマになりフラットから出てきたところを、反対側に住んでいたアイリシュの男性が、毛布で彼を包み火を消して、すぐアンビュランスを呼び入院させられました。後でわかったことですが、私の主人も買い物に行く途中で、偶然にそれを目撃しフラットの中が燃えているか調べましたが、煙っているものは床にあった古着だけでしたので、水をかけておいたそうです。その大事件がおきジョニーは病院に担ぎこまれましたが、お母さんは知らずに数時間以上過ぎても帰ってこないので、警察も心配なのか外で待っておりました。ジョニーの火傷は７５パーセントの危篤状態で、そのあくる日に彼は亡くなってしまいました。

人の命が如何にはかないか思い知らせられました。実際私たちはいつ天に召されるかわからないのです。私もいつ死んでもよいように、心の準備をしているつもりですが、常に善人として生きることは難しいものです。ジョニーの死はけっして彼のお母さんの責任ではありません。母親にしてみれば１１歳の子供は一人おきにしても法律的に違反ではなく、彼女はたぶん毎週息子を家に置き買い物にでかけていたでしょう。常に清潔できちんと制服をきて通学していたジョニーはお母さんに愛されていたと信じます。その愛する息子を突然の死でなくすことが、どんなに悲しっかたことかと同情しました。

その事件２週間後、道でジョニーのお母さんに会い彼女がどんなに悲しい思いをされたかと、慰めの言葉をおくりました。彼女は静かにこたえました。不思議なことにジョニーは亡くなる２週間まえにお母さんに言ったそうです。僕は天国へ行ったすばらしい夢をみたと。純粋で幼い彼は自分の死を神にしらされ、そして天に召されたのでしょうか？私はそうだと信じております。

自然のスケール、人間のスケール

中西　寛

本誌に寄稿させて頂くことになったきっかけは、今年の３月末に短期だったがロンドンを訪れ、講演をしたことである。東日本大震災から程ないことで、多くの方から暖かい言葉を頂いた。改めて感謝をしたい。

日本とロンドンの間は飛行機で約半日。現代人にとっては世界を飛行機で駆けまわるのが当たり前のようになっているが、言うまでもなくそれは科学技術の発達のおかげである。１３世紀にマルコポーロはヴェネチアと元の大都を往復するのに、行きは陸路、帰りは海路でおそらく数年ずつ費やしたし、１４世紀のイブン＝バトゥータはモロッコから中国をめぐる旅行を２０年かけて行った。ユーラシア大陸の端から端までの旅行はもちろん命がけだったし、生涯をかけた冒険だった。それが今、隣町への旅行とさして変わらぬように行えるようになったのは、ここ数百年の間に人類がいかに科学技術面で進歩したかの証左といってもよいだろう。実際、私が専門としている国際政治学も２０世紀に生まれた分野だが、科学技術の進歩によって世界が狭くなったことがその登場の前提である。

しかし、今年の日本での経験は、科学技術と人間の関係について改めて考えさせるものとなった。地震学が最も進歩していたはずの日本で想定を越えた津波被害が出た。安全性を誇っていた日本の原発で大規模な事故が起こり、今も収束していない。放射能汚染の規模とそれが人間に及ぼす影響についての論争も尽きることなく、人々は不安の中で暮らしている。

思い至るのは、自然が動くスケールと人間活動のスケールの違いである。端的な例として、「１０万年」という期間をあげよう。これは、原発から出る高レベル放射性廃棄物の保存期間である。原発で使用されたウラン燃料には色々な核物質が含まれるが、特にプルトニウムなどは半減期が長い。それらをガラスで固めて容器に入れ、安定した地層に埋めるなどして放射能が人類に安全となるまで保管しようというのが「地層処分」である。この安全になるのが１０万年という期間だという。

一言で「１０万年」と言うが、現在の人類（ホモ・サピエンス）が登場して１０万年経ったか経たないかである。これから１０万年先の人類がどうなっているか、地球がどうなっているかは分かりようがない。少なくとも今の科学では。従って、地層処分先が確定している国はほとんどない。今はフィンランドだけで、同国西部にオンカロと呼ばれる処分場を作って間もなく使用を開始する。スウェーデンも場所を決めて２０２０年から使用する予定だそうだ。イギリス、アメリカ、フランスなどでは処分場の選定中である。

この地層処分の安全性をめぐっても、原発推進派と反対派の間で激しい論争があるが、ここでは立ち入らない。ただ、１０万年という放射性物質は自然のスケールからくる数字で、今の人間にとってはコントロールできない数字だということである。言い換えれば、人間は、放射性物質が人間にとって無害になる時間を計算する科学は発達させた。しかしその放射性物質を無害化させる技術は今のところ手にしていない。科学と技術は一体ではなく、人間が観察を通じて知りうること(science)となしうること(technology)の間には、大きなギャップがあることを原発の使用済み燃料の問題は示しているのではないだろうか。

放射性物質が人体に及ぼす影響についても同様のことが言える気がする。原発事故後、日本人が飽きるほど知らされてきたのは、100 ミリシーベルト以下の被曝が与える人体への影響については科学的結論は出ていない、つまり、影響があるともないとも言えない、という情報である。これは、過去のデータの不足に由来する部分もあるが、被曝の最もありそうな影響であるガン発生のメカニズムが解明されていないし、人間が自然に浴びる放

射能と人工的に浴びる放射能の影響を区別することが困難という理由もある。恐らく今後、調査が進んでも、確定的に、これだけの放射能でこうした影響が出る、といった形で明らかになることはなく、この程度浴びれば、何パーセント、病気になる確率が増える、といった形で表現されることになるだろう。これは科学の限界ではない。科学的には確率表現が正確なのだが、それは、つまり放射能と人間がどのようにつき合うかという技術的な問いに対しては十分ではないのである。

別の話になるが、今年はアメリカのスペース・シャトル計画が終了したことでも大きな意味をもつ年だった。人類を月に運んだアポロ計画の後を受けたスペース・シャトル計画は、人類が宇宙を日常的に利用できるようにする道を開くことが期待されていた。飛行機と同じ感覚で宇宙に行けるようになるきっかけとなることが想定されているのである。しかし 1986 年のチャレンジャー事故、2003 年のコロンビア事故を受けて計画は見直された。安全性を確保するコストが使い捨てのロケットよりも高いことが確認され、所期の目的を達することなくシャトル計画は終了したのである。アメリカは、自らが主導して開始した宇宙ステーションに人員を運ぶ手段を今のところ失い、かつてのライバル、ロシアのロケットに頼る状態になってしまった。

宇宙に関する科学技術は原子力と並んで 20 世紀において人類が発達させた最も目覚ましいものの一つである。今は気象やＧＰＳは人工衛星なしでは考えられず、宇宙利用は日常化している。しかし人類の宇宙への旅という点では工学的限界を乗り越える見通しが立っていない。ここにも科学と技術のギャップをみることができる。

その他にも、20 世紀に発達した自然科学は、それまでの人類の科学とは異なるスケールの知識を開いた。天体科学、地質学等の発達で、宇宙の歴史がビッグバン以来百数十億年であること、太陽系と地球の歴史が 45 億年程度であること、大陸が数千万年から数億年かけてその姿を変えており、プレートという単位で移動していること、などが分かってきた。今回の地震を引き起こしたのは太平洋プレートと北米プレートのきしみが原因であり、東海から南海にかけての地震はユーラシアプレートとフィリピン海プレートのきしみで起きると予想されている。プレートといった概念そのものが 20 世紀後半に始めて理解され、プレート型地震のメカニズムが説明できるようになったのである。

これ自体は自然科学の重要な発達である。しかし人類が経験してきた百年や千年、最高でも何万年という期間は自然のスケールからすると余りにも短い。プレートが数百万年以上のスケールで動いていることを知れば、これまで数百年ごとに地震が起きてきたからといってその通りに今後とも起きるとはとても言えない。数百年が数千年にずれたとしても、自然のスケールからすれば誤差の範囲でしかない。ここでも地震や地層に関する科学と、それを人間社会に適用した予測や防災に利用する技術のギャップの大きさという問題がある。

科学者や技術者は今はギャップがあるにしても、人間の科学技術の発達でそのギャップは埋めていける、自然の挑戦に対して人間はそれを乗り越えていける、というように答えるかもしれない。しかし私には、そうした挑戦に答えていくことは、人間を人間でない存在に変えていく気がしないでもない。人間は知的には数万年から数百億年のことを考え、理解することができる。しかし個人としての人間の生命は、今の人間のあり方を前提とすれば、医学が発達しても百年を大きく超えることはないだろう。それを越えるとすれば、細胞を人工物に置き換え、人工知能や人工臓器によって人は生きることになりそうである。すでにそうした方向に科学技術は進んでいるし、それは知性的存在としての人類が自然を克服し、支配するということの意味かもしれない。しかし自然を征服した人間が、人間と呼べるのか、私は懐疑的にならざるを得ない。だが、人類に他の選択肢があるのだろうか。大きな災害に見舞われた日本で、こうしたよしなし事に思いを致している次第である。

コーンウォールの旅

田村陽子

夫が生きていた頃、いつも言っていた。「いつか Cornwall に行ってみよう」と。しかし選んだ所は、どういうわけかスノードニアだったり、Lake District だったり、日本への一時帰国だったりして、そうこうしてるうちに病気になって亡くなってしまった。それから５年経った。

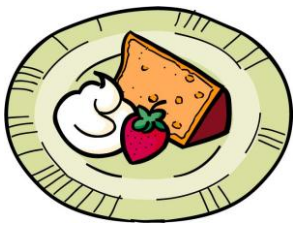
今年こそ夫の言っていた Cornwall に行って見たいと思った。Thomas Cook に行ってみると「Coach Tour -ST. Ives & Isles of Scilly, 8days」というのが目にとまった。ブローシャに写された ST. Ives は海の色が何とも言えず美しく、パームツリーが南国情緒たっぷりで、心をかきたてた。３月早々に申し込みをし、その日を心待ちしていた。

その日は７月半ばで土曜日。曇り空の早朝だった。海の大好きな娘と一緒だ。家の近くのバス停で、ホリデーコーチを待っていた。予定通りの時刻に来たそのコーチには私達の外に４人の英国人らしい人が乗っているだけだった。たったの６人で ST. Ives へ? 変だナと思っていると M１を少し行った所で降ろされた。別のに乗りかえるらしい。その Interchange には１０００人だろうか２０００人だろうか、すごい人混み。ほとんど老人のようで、杖をついている者、車椅子の人もいた。どこかの避難所の収容所の印象をうけた。外は曇り空から大降りの雨に変わっていた。「エライところに来てしまった!」と未だ旅が始まったばかりなのに、心が曇っていた。娘も期待が外れたのかポカンとしていた。そのうちにアナウンスが「Bay No ―」と叫んでいるのが聞こえてきた。Information Desk へ聞きに行くと「ST. Ives は Bay ３、 １２：００の出発だ」と教えてくれた。出発まで１時間以上もある。待合所には旅から帰ってきた人とこれから旅立つ人でごった返していた。カフェがいくつもあって食事をしたり、コーヒーを飲んだりして待っている。国内だけでなくヨーロッパなど国外のコーチの乗り継ぎ地点にもなっているそうだ。Victoria にも National Express のコーチステーションがあるが、あそこは若者でいっぱいで、活気があって、雰囲気がかなり違っていた。

待っている間、隣の人にどちらまで?とたずねると「アイルランドへ」と。年とった母親らしき人と一緒だ。「なーる程、こんな親孝行の仕方もあるのか」と納得。そう言えば私ももう７０才に近いんだ。この場にいるのに何の不思議があるものか、だんだんそう思えてきた。まもなく「ST. Ives, Bay No3」とアナウンスがあったので、土砂降りの中を駆けていくともう何人も乗り込んでいた。総勢２１名、コーチはハンガーレーンを通って M４を走り、M５に入りそこのどこかで休憩し、そこでさらに１１名が加わり、３２名になった。ドライバーはクリスと言う名で Cornwall 生まれの Cornwall 育ち、と自己紹介があった。コーニッシュ　パスティの食べすぎなのか、お腹が大分飛び出していた。運転中こまめに、「右に見えるのは・・・左に見えるのは・・・」と町の歴史や色々な説明があり、最後に必ず面白いジョークを言って皆を笑わせた。

夕方７時頃、やっと ST. Ives のホテルに着いた。その頃は雨も止んで、ST. Ives の海がそれはそれは美しく太陽に映えていた。ホテルは高台にあって、ラウンジと食堂から海が一望に見わたせた。海は波静かで、ボートが海にくっついているようだった。Interchange での暗い気持ちはいつの間にかどこかへふっとんでいた、「素晴らしい所にきた！よかった！」心からそう思った。ホテルの食事のテーブルはいつも同じところに決められていて、私と娘と英国人の老夫婦の４人がけだ。彼等はすぐに自己紹介を始めた。ハンプシャー出身の奥さんはスーと言って、とてもおしゃれで上品な婦人だ。ダンナ様はチャーリーと言う名で、サーネームが Brown なので「漫画のチャーリー．ブラウンと同

じだよ」と言って笑った。８日間、朝と夕食が一緒だったので、すっかり心がうちとけて、食事中笑いっぱなしだった。彼等は ST. Ives は３度目だ。それで色々な情報を教えてくれたので、大助かりだった。夕食の後、歌やクイズ、ギターの演奏等のエンターテイメントがあって、楽しんだ。ホテルの食事はカロリーが高く、野菜が少なく、一週間で２Ｋｇも太ってしまった。お味噌汁とご飯が恋しかった。娘はコーニッシュ　パスティとクロッティッドクリームとスコーン、アイスクリームを楽しみにしていたので、イヤになる程食べたので、益々大きなお腹になってしまった。　ST. Ives のホテルを基点にして、毎日コーチ．ツアーにでかけた。



日曜日。公共の乗り物が走らない海岸線を見ながら走った。行っても行っても、広い野原と美しい海岸線を見ながら走った。Land's End が余りに観光ずれしているからと言って、その手前の Sennen Cove という所を見た。波が荒く、サーフィン向きのところだ。その日の夕方、近くの教会で地元男声合唱団の演奏を聞いた。メンバーの殆どが白髪で，ピアノ伴奏者は背中が曲がったままの８９才の男性。指揮者は唯一の女性で、かなり年輩のようだった。全曲暗譜で、顔を紅潮させ、すばらしいハーモニーを聞かせてくれた。感動した。

月曜日。Marazion と言う町へ行った。そこから目の前に ST.Michaels Mount という離れ島を見た。そこにかつての修道院が建っていた。引き潮の時にはそこまで歩いていけるのだが、私達が行った時は満潮で歩けなかった。フランスのモンサン．ミシェルを思い浮かべた。

火曜日。Penzance の町からフェリーに乗って３時間、Isle of Silly という島に行った。イギリスで一番南国的な所と書いてあったので期待していたのだが、朝から雨で、海も波が激しく、何人もの大人や子供が船酔いして、床にうずくまっていた。島についた頃、幸いにも雨が上がり、太陽が出てきた。島は小ぎれいで、白壁の赴きある家が静かに建っていた。そして紫色のアガパンサスの花をあちこちでみかけた。背が高く、花火のようにパッと開いた、オシャレな花を私の庭にも植えて見たいナの思っている。

水曜日。一日、自由行動。高台にあるホテルの前を、ずっと下に海に向かって降りて行くと、汽車の駅がある。そこから海岸線に沿って汽車が走る。ST. Erth という所までリターンを買った。片道１５分位だが、素晴らしい眺め。ST. Erth に着くと、ホテルに帰る気がしなくて、ぐずぐずしていると、そこに来たバスにとび乗った。Penzance 行きだ。昨日は船着場しか見ていないので、今度は、あっちこっちのお店をみたり、庭を見たり、マーケットを見たりした。ホテルに帰ると、夕食まで時間があるので、テート．ギャラリーに向かった。石畳の細い道を通り、かなり歩くと、海辺が見えてきた。ここにもこんな美しい海辺が!そしてそこにテート．ギャラリーはあった。テート．モダーンなので私の好みではなかったが、そこの３階から眺めた海は素晴らしかった。青色に白が混ざったような、緑色に白が混ざったような、そんな色だ。

木曜日。珍しく一日中快晴。Paradise Park という所で熱帯の鳥と熱帯植物を見た。それから Lizard という半島の先端に向かった。途中４５°の傾斜を up and down して Mullion cove という入り江に着いた。海はあくまでも青く、小さな島や岩が、地球が生まれたその時は、こうもあったろうと思われるくらいだった。空気が澄んで、心地よかった。Lizard になんか行かなくてもよいとさえ思った。案の定、Lizard に着くと、カフェやお土産の店があるだけだった。

金曜日。最終日。Truro の町を通って ST. Mawes へ。 ST. Mawes は rich retirement の所らしく、豪華な家が建ち、高価なヨットがいくつも浮かんでいた。ホテルに帰ってから、

帰り仕度をした。明朝は５時起き、７：３０の出発だ。ST. Ives での最後のお風呂に入って休んだ。コーンウォールの水は軟水なので、泡立ちが良く肌はつるつる、髪はつやつやになった。

　あじさいの花、そしてアガパンサスの花。澄んだ空気。コーンウォールはとてもステキな所だったョ。と亡夫に報告して床についた。

英国春秋俳壇

曼珠沙華

小川　のり子

曼珠沙華　　狐（いざな）　誘う　　灯りかな

ためらいて　はらりと乱る　花すすき

赤とんぼ　命知らずや　指の先

月光に　寝屋の白布の　華やぎて

荒武者の　馥郁（ふくいく）として　菊人形

秋光に　色失いて　しじみ蝶

凍蝿（いてばえ）も　思いは多し　首かしぐ

鋭さを　空に突き刺し　もず去りぬ

寒月の　ひっかかりたる　塔の先

座禅物語り

佐山菫子

ＪＡの企画に坐禅会というのができて、月に二回もたれることになった。最初から行く気ではあったが、忘れたり、都合がつかなかったりして、８月後半のものにやっと出席できた。ニュースレター（１５８号）に出た対本師の記事を興味深く読ませていただいたのが、きっかけだったと思う。聞きなれた熟語を新しいというか、古いというか、本来の意味を探るという形でいろいろ説明しておられるのが大変、役に立った。『以心伝心』というのは、心というものは放っておいても自然に伝わるものだとくらいに思っていたが、気持ちは、心を尽くし、言葉を尽くしてはじめて伝わるものなのだとの説明があって、この言葉の意味がはじめてわかったような気がした。日本を離れ海外に居住して長い。そんなとき、ロンドンで日本人の心の根幹をゆすぶる何かについて、触れさせていただくのであるから、ありがたいことである。

やっと出席できたはじめての坐禅会で、まず、いろいろお話があった。うかがいながら、わたしなりに大いにうなずけるところがあって、驚いた。大変個人的なことではあるが、それについて書かせていただこうと思う。わたしは禅宗なるものは、ほんの表面をかすっただけで、その要の体験はない。しかし、父を通じて常に禅宗なるもののざわめきの中にはいた。故郷に自性寺というお寺があり、父はそこのいわゆる檀家であったらしい。ことあるごとに、その寺の和尚さんが来訪なさったし、わたしたちもそのお寺にうかがい、奥さんの手作りのめずらしい食事に舌鼓をうたせていただいた。気さくな方だったが、琴を弾かれる方で、目前で、弦をおさえ、弦をはじいて奏でてくださる美しい音色に、別世界にいざなわれる思いがした。わたしが、まだ、とても小さいときに、母が夫婦喧嘩をして、兄とわたしを連れて、逃げていったのも、そのお寺だったと思う。暗いけれど、何か安心できるところであったように記憶にはある。母が５０歳という年齢で癌のため死去したとき、『微笑妙幸大姉』という、母の名の一文字が入った戒名をいただいた。わたしはまだ高校生で、母に取り残された悲しさになすすべもなかったが、この戒名を見るたびに、やさしく、暖かだった母を思い出すことができた。

父は外科の開業医であった。若いころは座禅で座っていたとか聞いたこともあるが、宗教のことをとりたてて話してくれたことはなく、禅は哲学だなどと言っていたような気がする。母がクリスチャンであることにも、別に問題はなかったようだ。わたしが中学のとき、英語教育のためにキリスト教の学校に行くことにも賛成してくれたし、クリスチャンになりたいと言ったときには早すぎると言って、一年間待たねばならなかったが、最後には「自分で決めなさい」と言って許してくれた。しかし、わたしに茶道や華道や能の鑑賞を強くすすめてくれたのは、父が禅文化を高く評価していたからだと今は思う。生きるということに真剣だった父はわたしにとってとても気骨のある人に思えた。とても厳しい人であったが、背骨が一本きちんと通っていることが子供心にも実感でき、そのがんこさに泣かされながらも、ひそかに尊敬していた。こわい父ではあったが、話ができた。坐禅会のお話で対本師が臨済宗と曹洞宗の違いに触れられたが、臨済宗というのはわたしにはなつかしい言葉であった。というのも、父がその臨済宗妙心寺派の人であったから。

父の机にはいつも『花園』という小冊子がおいてあったが、それも臨済宗の大学である花園大学から発行されたものだったのだと、今は思う。母が亡くなったとき、父は早朝に起き出し、離れの座敷で何枚も何枚も般若心経を写経し、その何枚かが表装して、壁にかけてあった。わたしには何も話してくれなかったが、悲嘆をこんなかたちで乗り越えようとしている父の姿に、その嘆きの深さを知らされる思いだった。わたしが中学のころ、まだ、

母が生きていたころのことだが、ある日父がめずらしくとても興奮して帰宅した。汽車の中で山田無文なるお坊さんの隣に座りあわせ、知り合いになったのだという。父の姓は『山田』であったから、同姓のよしみで、なにか、親戚のような親しさを感じたのかもしれない。しかし、子供心に、なんで親戚でもない人にそんなに熱くなる必要があるのか、当時はわからなかった。そのうち、離れの座敷の鴨居に立派な額がかかり、そこには無文老師の筆で『仏心鬼手』と大書されていた。外科医の父にとってはどんなにかありがたい４文字であったことだろう。仏のように、なにものにもこだわらぬ心で、その手はためらうことなく一筋に手術に突き進むということなのだろうと思っている。父が８５歳で死去して、葬式のため帰国したとき、自性寺の昔なじみのお坊さんが、もう、高齢であられたが、葬式をしてくださった。父も本望であったろう。

対本師の話はすすんで、京都の天竜寺の名前が出た。ご自身がそこで山田無文師のもとに修行をなさったという。無文師は結核を患っておられたが、見性というさとりの体験を何

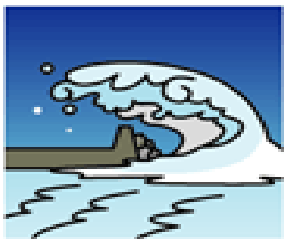
度か繰り返されるうちに、結核菌を保持しながらも、その症状は壊滅したのだという。身心一如の驚くべき深い事実である。その天竜寺は偶然にもわたしが今夏帰国して、友人と京都を旅したとき訪れた数少ない寺のひとつである。建物と庭の壮大さに心うたれ、絵葉書を購入し、ロンドンに帰宅後、毎日、眺めていた。だから、あの寺が山田無文老師の寺であったと知って、父を介したなにかのご縁のような気もしている。ウィキペディアに、ＮＨＫテレビの「あの人に会いたい」という番組からとったという彼の結核克服の小話が出ていた。真偽のほどはわからないが、なかなかおもしろい。無文師の兄は結核で死去し、無文師もまた闘病中。ある夏の日、縁側でそよかぜに吹かれながらふと考えたと言う。「風とはなにか」「風とは空気」「空気とは何か」「空気は自然」「その空気を朝から晩まで呼吸してわれわれは生きている」とここまで考えが進んだときに、「そうだ。わたしの後ろ盾には大自然がついている」との考えがひらめき、寝ていられなくなったのだという。そうして、元気が出てきたとき詠んだ一句が次ぎのものだという。「大いなるものに抱かれあることを/今朝吹く風の涼しさに知る」南天の実が赤かったの夏の日の出来事とか。

老師はまた、花園大学の学長でもあったらしいから、父が偶然に座り合わせてあんなに喜んだのも、今は、想像がつく。父の葬式で帰宅した際、父の書棚から無文師著『六祖壇経講話』の上中下をもってきた。読もうとしたが、難解で、いまだに手はついていない。その一冊一冊に禅の言葉と共に無文師の署名が筆で入っている。しかし、父が読んだ気配もないから、父にとっても、がんばっては見たが、むずかしかった書物なのだろうと思う。何年か前にわたし自身の興味で、無文師の『十牛図』を購入した。これも格別にむずかしいものだが、こちらは、まだ、ほんのりとわかる気がするところもある。その序に人間が他の動物と違うところは、人間が鏡を持っていることだとの一節がある。鏡をみて反省できるのが人間の値打ちだという。そして、「鏡に映る自分はすべて客観である。絶対の主観は鏡そのものである。鏡はすべてのものを映していくが、鏡みずからを映すことはできない。その何ものにも映すことのできない主観が、絶対の主観であり、それが諸仏の真源である。大円鏡智といわれるのはそれである」(『十牛図』禅文化研究所、ｐ．７）とある。したがって、達人と達人が出会ったならば、鏡と鏡を照らしあわせたようなもので何も映さない。その、何も映さない、映されるもののないお互いの心が、本当の源であり、本当の奥底であり、お互いの心に一念の念もおこらないところが諸仏の真源であるというのであるから、おそろしいほどに奥が深い。深淵を垣間見て目がくらみ、こんなことを自分の生き方と結びつけることなど到底できないと思ってしまう。父もわたしも、禅宗にさわりながらも、はるかに俗人として悲喜こもごもの人生を生きてきたことがよくわかる。前述した対本師の『坐禅会レポート』の冒頭にこの坐禅会は身心のバランスをとる健康法としての座禅と、日本文化の支柱のひとつである禅のことばを学ぶことにあると記されているが、それに励まされて、やっと出席できたようなものである。

何故、どれ程、そして何処まで

（福島原発事故の過去、現在、未来）

津久井安子



９月の二水会は私にとって大変示唆に富んだ例会でした。
講師の小出氏の語る事故の経緯は、千年に一度と言われる巨大地震により引き起こされた津波により、先ず外部からの電源が使えなくなり、更に地下の非常用電源が津波による浸水で壊れ、その上最後の手段の非常用蓄電池も、８時間使用可能の筈が、６時間で終了、これ以降の事態についてマニュアルが無く対応は二転三転した、と事故原因を述べておられました。

これは信じ難い事の羅列ではないか！というのが私の率直な感想でした。
１、地方都市の一般家庭への送電でさえ、事故や工事のための停電に備え、複数のルートを設けているのに、地震や津波の多発地帯に接しており、台風や冬季の異常気象で送電鉄塔が倒れた例を知りながら、外部からの電源を一つのみとしたのは何故か。
２、非常用予備電源について言えば、地下鉄やビル等さえ複数の電源設備を備えるのが常識なのにも拘わらず、非常時に使えないのでは、そもそも非常用とは言えない。
３、蓄電池が８時間との仕様でありながら、６時間しか保たなかったのは、他の機器も含めて、どの様な点検を、何を目的に、何回行っていたのか。

これらの答えの一部をＷｉｋｉｐｅｄｉａより抜粋しますと、
｛　｝内は　http://ja.wikipedia　福島第一原子力発電所事故より

｛1999 年まで IAEA の事務次長を務めた原子力工学専門家ブルーノ・ペロードは 1992 年ごろ、東京電力に対して、福島県に設置されているマークⅠ型の弱点と言われていた格納容器や建屋の強化を助言し、電源や水源の多重化、水素爆発を防ぐための装置をつけるように提案したが、東電は耳を貸さなかった。2007 年の IAEA の会合で、福島県内の原発は地震や津波対策が十分でないと警告したときに、東電は自然災害対策を強化すると約束したものの、電源に関する基本的な津波対策を怠っていた。ブルーノ・ペロードは、この事故は天災というよりは人災であって「チェルノブイリ原発事故はソ連型事故だったが、福島原発事故は世界に目を向けなかった東電の尊大さが招いた東電型事故だ」と指摘した。

2011 年 3 月 23 日、1970 年 －1980 年頃に 4 号機を除く 5 機の設計や安全性の検証を担った東芝の元技術者達は、「事故や地震でタービンが壊れ飛び原子炉を直撃する可能性を想定し、安全性が保たれるかどうかを検証した。M9 の地震や航空機が墜落して原子炉を直撃する可能性を想定するよう進言したが、『千年に一度のことを想定する必要は無い』と一笑に付され、起こる可能性の低い事故は想定から外された。当時は『M8 以上の地震は起きない』と言われ、大津波は設計条件に与えられていなかった」と語った。｝

その後も｛2007 年 2 月、静岡地方裁判所での証人尋問で非常用発電機や制御棒など重要機器が複数同時に機能喪失することまで想定していない理由として「割り切った考え。すべてを考慮すると設計ができなくなる」と証言した内閣府原子力安全委員会班目委員長｝の下で安全神話は守られてきました。

事態を察知したアメリカからの支援をアッサリと断った（講師の表現では）菅首相は平和ボケではなくて、東電の言うままのコメントを繰り返していた点からも東電呆けと言うべきで、そ

して実態を知らせる任務を帯びている筈のマスコミも、如何に危険な状態に陥っているのか当時も、その後も国民に判りやすい表現で知らせようとしないのは何の理由からなのか知りたいと思う。

何故なら、専門家は危険性を十分認識していたのだから、
｛事故直後の原子力災害特別措置法第十条、同法第十五条による通報に伴い、事故の対応や住民の避難などの対策拠点として機能すべく位置づけられた 原子力安全・保安院が、本原発に通常 7 人いる、安全を監督する立場の保安検査官を 3 月 17 日までに全員福島県庁に移動させ、本原発に人員を残さなかった。｝危険で無いと言っていた人々が去り、多量の被爆をしたのは誰だったのか。

しかし真面目な科学者も多いし彼は心を痛めている。例えば｛産業技術総合研究所活断層・地震研究センターの岡村行信センター長らは、2004 年頃から貞観津波が残した地中の土砂を調査し、痕跡が宮城県石巻市から福島第一原子力発電所に近い福島県浪江町まで分布し、内陸 3 km－4 km まで入り込んでいることを確認した。2009 年の国の審議会（原発の耐震指針の改定を受け電力会社が実施した耐震性再評価の中間報告書について検討する審議会）で、大地震や津波を考慮しない理由を東京電力に対して問い質したが、東京電力は「まだ十分な情報がない」「引き続き検討は進めてまいりたい」と答えるにとどまった。震災発生後、岡村センター長は、警告されたデーターが完全でないことを理由にリスクを考慮しないという姿勢はおかしいと述べ、「原発であればどんなリスクも当然考慮すべきだ。あれだけ指摘したにもかかわらず、東京電力からは新たな調査結果は出てこなかった。『想定外』とするのは言い訳に過ぎない。もっと真剣に検討してほしかった」と話した｝

また、｛国会質疑における東京大学教授児玉龍彦の発言　2011 年（平成 23 年）7 月 27 日、東京大学アイソトープ総合センターセンター長、兼先端科学技術研究センター教授である児玉龍彦は、衆議院厚生労働委員会に参考人として出席し、「厚生労働関係の基本施策に関する件（放射線の健康への影響）」について、双葉町や大熊町などで除染などの現地対応に追われた経験を踏まえた発言を重ねた。

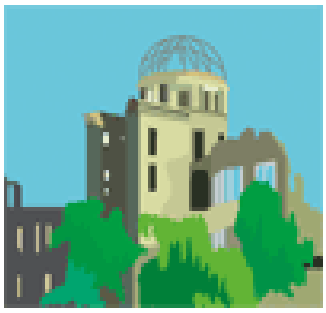
福島第一原子力発電所事故による被曝の危険性について
母乳からの検出放射線量は、すでにチェルノブイリ事故時のガン発症患者の体内検出量（6 Bq/L）と互角であり、外部被曝と違って低線量でも健康被害は甚大である。 放射性物質の 1 年後残存量は、核爆弾爆発後は 1/1000 だが、原発事故後は 1/10 に過ぎない 福島原発の放出量は、熱量換算で広島原爆 30 個分、ウラン換算で 20 個分（政府 8 月発表では、6 月時点の放出総量は 168 個分） 単に WBC で内部被曝計測するだけでは、特定臓器に集約される特定線源を把握しきれないので不備 遺伝子は個々人によって 300 万カ所が異なるので、全員同一の対処法はナンセンス、パーソナライズが重要
内部外部の被曝を問わず、被曝病発症と被曝を関連づけるには世界でも前例が乏しいため、チェルノブイリの場合も 20 年分のデータがそろうまで無理だった 非線形で、非常に狭い区画で点在するマイクロ・ホットスポットの脅威が、行政対応には反映されていない、除染も補償もそのルール作りもいっこうに進んでいない。20km 圏とか 30km 圏という円状のくくりは無意味で、地域毎や学校毎などで細かく計測し調査しないと不備 などと発言、政府と国会の対応を厳しく非難した。詳細は膨大であるため、公式議事録を参照

政府への提案として以下の 3 点を発言した。
国策として（機器導入向けの補助金制度及びその宣伝や指導を指していると思われる）食品、土壌、水の線量測定には、安価な GM 管方式ではなく高価格帯シンチレータを投入し、

高い精度で、土壌と水の除染、食品製造ラインへのシンチレータ計測ライン増設により線量基準超の不良品を排除、などを可能にすること。
子供を守ることを最重要視し、実用的な新法を早急に制定する。現行法では、取り扱うことを許可される放射線量、核種が許認可によって厳密に規制されており、セシウムは認可をもらっておらず、除染作業も東京へ持ち帰って行っており、すべて法律違反の行いである。高価な最新鋭測定機器を有する各研究施設も、これでは活躍できず、現行法は実態に合っていない。 除染技術の開発や事業化について、既に様々なノウハウを有する各民間企業の力を結集し民主導とすること。官主導でパフォーマンスの悪い公共事業化で予算肥大化する余裕が、財政難の政府にあるとは到底思えない。}

これらがどれ程活かされているのか、今回の講義では知る事が出来なかった。知らせねばならない事を、知りたい人々に伝える、そのマスコミの現状について、自由に書けない状況が一般化されている旨のお話がありました。その結果は”未だ本当の事は知らされていない。彼らは出来るだけデータは隠そうとしていて、今後の見通しも明らかでない。” とも言われた。これは日本の場合単に原発事故だけでは無いと思う。かって田中角栄の金脈問題の本が出版された時に、所謂首相番の記者達から「そんな事は皆が知っている、ただ書かなかっただけだ。俺はモット他のことも詳しく知っている！」との発言が相次いだ。では何故彼らは其れを記事にしなかったのか。創価学会の言論弾圧事件や、大会社の秘事も同じ事と思えてならない。新聞社やＴＶはスポンサーが怖いし、政府は膨大な許認可権を持っている。

例えば放射能の人体に及ぼす影響について、ダブルスタンダードは被団協（原爆の被害者組織）のみではなく、心ある医学者の考えでもある。たとえ１ミリシーベルトでも無害と言う証拠は無い。だから妊産婦はＸ線の検査を原則受けられない。その理由は未だ人類が人工的放射能を浴びた場合の遺伝的にハッキリしたデータは揃っていないから。例えより安全といわれる天然の放射能でも其れは我々の遺伝子を確実に破壊している。子供の頃滑らかだった爪の表面が年齢とともにざらついて来るのは、新しい爪を作るＤＮＡが少しずつ破壊され、修復が間に合わないからと言われている。またこの団体が被災地の住民に”被爆証明を貰って置くように。”と働きかけている事を、あたかも団体のエゴと取られかねない風に言及していたが、沢山の被爆者が健康を損ねた身体で、どれ程の身体的、心理的苦痛を払って漸くかの最高裁判決を得たのか、広島で被爆した知人（彼女は被爆者手帳を「金が目的で頑張ったのではない。」と拒否した。）を持つものの一人として、同じ日本人として、悲しく思いつつ聞いた。



日本人は熱し易く、冷め易い、と繰り返された言葉を使えば、冷めてはならない事について、警鐘を鳴らし続ける責任がマスコミに有るもと考えておりました。しかし、一例を挙げると爆発事故後の大気の状態、そのシュミレーションをみれば飯館村付近に危険な量が舞い散った事が一目瞭然だったにも関わらず、官庁ＨＰでは発表されながら、政府も、報道する側も、知らせず、避難指示は一切出ませんでした。飯館村での高数値が出てしばらくしてから実は・・・と知った国民がほとんどであり、その結果、村民はその間普通に生活を送っていましたから大量の放射線を知らないまま浴びざるを得ませんでした。

４月中旬まで東電は廃炉という言葉を一度も使おうとはせず、再稼動前提の対応に終始していました。内外の非難をものともせず政府もそんな対応を支持し続け、元与党の自民党も菅首相や他の政府要人への個人批判には熱心だったが、政策全体及び政府の東電への対応批判、国民への情報やメッセージは、どれ程有ったのか、知る事が出来ませんでした。元々原子力推進を一手に推進していたのは自民党であり、政官財のトライアングル癒着の温床だった経過から見て、上記のデータの公表や政府の東電への対応に対しても、政府を

不用意に叩けば元をただせば・・・と反論されるのも目に見えて、東電を悪にするわけにもいかないのが原因では無いと思わざるを得ません。その結果危機的状態は放置され、国民は必要な情報も知る事が出来ないまま、いつも事後報告に甘んじさせられているのが、日本の今の模式図と言えると思います。

例えば眼前の問題の一つは、セシウムやヨウ素より遥かに危険と言われるストロンチウムの検査値が今まで全く発表されていません。当初は金と時間がかかる事と思っていたが、政府や東電には発表する意思が無いようにみえます。その理由の一つとして、風評被害が挙げられていました。デマに踊りやすいのは日本人だけではなく、今春のＯ－１５７に対するヨーロッパのマスコミの対応を見れば、解るとおり、当然のことながら誰でも自分の身は可愛い、危険は避けて通りたいと思う、おそらく私も同じような態度を取るでしょう。

それでは風評被害への最良の対応は何かと考えた時に、第一に納得できる科学的根拠を少しでも早く公にする事ではないか、と思います。今回の講義のレジュメの日付が本年４月２４日付けであり、そのまま使用できる事は、日本国民が未だもって蚊帳の外に置かれた状態であり、之は単にマスコミだけでなく、私達の怠慢でも有ると思います。現在進行中の事実、そのデータ、そして何よりも今後の見通し、それらを明らかにするよう政府や企業に働きかける事、その上で最良の対処方法を行政、科学者、技術者が公開の場で討議し、立場や権威ではなくて理論的根拠で決定する事。

その際大切な事は“平和ボケ”　“核アレルギー”という感覚的な言葉が主に原発推進や、核武装を唱えていた人々から発せられた事を思いおこし、彼等の発言がどの立場からなのか、データは私達をどの方向に導こうとしているのか、きちんと見る必要が有ると思います。例えばプルサーマル（講師は半永久的に使用出来る日本にとって理想的エネルギー源と表現しておられました。）の将来戦略に言及された事からも講師がどの立場から今回語ったのか象徴的に示していると思います。いわゆる権威者の専門家的発言に見られる様に、先ず原発ありき、の姿勢からではなくて、何がどれ程危険なのか、本当に完全にコントロール出来るのか、納得出来るまでの検討を経てからの実施でなくてはならないのではないでしょうか。

現状を見る限りこの実現は今は夢かもしれません。しかしこの悲惨な事故から学び、再びこの様な事故を繰り返さない事は、私達がするべき、そして何のしがらみも無い私達のみが出来る最初の一歩と私は考えます。既に行動を起こした方々もいらっしゃるでしょう、皆様の情報をお知らせ下さい、微力ながらお役に立てれば幸いです。

「今から、出来るだけ多くの人の力を出し合って、新しい歴史を作るまで。」

英国春秋小事典
チェルノブイリ原発事故
１９８６年4月２６日、旧ソ連ウクライナ共和国キエフ市北方にあるチェルノブイリ電子力発電所４号炉で起きた。この事故で原子炉建屋崩壊。放射能放出量は希ガスを除き約 5,000 万キユリー。牛乳、肉、野菜などが汚染され、半径 30km の住民 135,000 人が避難した。事故は電力を発生させる実験中で、炉の自動停止装置、安全装置を遮断し制御棒をほとんど引き抜いて運転したため出力が急上昇、暴走状態となった。炉は安全性が不足の設計ミスの上に人為ミスが重なって起きた。　「現代用語の基礎知識」より

リストそして「愛の夢」

ウィンター　千津子

私が、11，2 歳ころ、まだ、音楽学校のピアノ科へ行きたいと胸を弾ませていた頃、リストの「愛の夢」が弾けるようになるのが夢でした。しかしながら、その頃はまだ気分の変わりやすい年齢、音楽学校はどこへやら、受験校への道に入ってしまい、段々とピアノとも縁が薄くなってしまいました。それから 40 年ほど、ずっとピアノという楽器と一緒に暮らしていましたが、幸か不幸か、私の興味はあちこちに飛び、ピアノに戻ってくるまで、50 年近くもかかってしまいました。ピアノを再開するにあたっては、数人の友人の暖かい励ましが大きく影響し、今はピアノを弾くことに戻れるようにしてくれた友人達に大いに感謝をしています。そして、まずは新しいピアノを買い、ピアノのレッスンを始めたのが３年前、今ではピアノの練習を軸に毎日が回るようになってしまいました。それは楽しい、しかしその反面、練習をしなくてはいけないという義務感があり、楽しみと苦痛とが背中合わせになっています。それでも楽しみの方が勝っているので続けられるのでしょう。子供の頃に習ったことが、この歳になってこんなに役に立つなんて。子供のころ、ピアノを習わせてくれた母に感謝です。

そして、ピアノのレッスンを再開して、3 年、関節炎の手と闘いながらも、楽譜の冒頭に、詩人のフライリヒラートの「おお、愛しうる限り愛せ」という詩から始まる、念願の「愛の夢」が弾けるようになりました。「愛の夢」は、単なる男女の愛ではなく、人間愛を謡ったものということも、今になって学びました。この曲をきちんと弾けるようになるまで、6 ヶ月かかりましたが、50 年以上たって私の夢がかなったのです。私はとても嬉しくて、友人達に強制的に聴いてもらったりもしました。

これをきっかけに、この曲を作曲した、リストにより多くの興味をもち、いろいろな文献をあさりました。偶然にも 1811 年生まれのリストは今年で 200 年、そして 1810 年生まれのショパンは 2010 年には、生誕 200 年を記念してあちこちで、ショパン 200 年祭の音楽会等が開かれましたが、それに比較して、リストの 200 年祭は静かに思われます。それでも、いろいろなピアニストが小さなコンサートホールでリストの曲目の演奏会を開いています。

フランツ　リストは音楽史上、最高のピアニストとされています。リストがピアノを始めたのは 6 歳のときで、父親が弾いたピアノを全て、耳で聞き取って弾いたというのですから、その才能が覗えるでしょう。その後も順調にピアノに専念、父親がマネージャーとなり、各地で演奏を行います。しかし、その父親も 15 歳の時に亡くなり、生活を支えるためにピアノを教えるようになります。17－8 歳の頃、貴族の令嬢にピアノを教え、彼女と恋に落ちますが、彼女の父親が、そのような芸人（ピアニストは芸人？）とは結婚させない、と強く反対され、リストは自分の育ってきた環境を省みたとき、一応、読み書き、計算等は習ったものの、ピアノ一筋で、一般教育が欠けていたことに気が付きます。その後 40 歳すぎても、少年期に「計画的な学習がなかった」ことを後悔し、平民の家にうまれ、田舎で育ち、幅広い教育を受けていない、そのようなコンプレックスを根強くもち続けました。
それはともあれ、リストが 20 歳の時、当時のバイオリン界のスターで天才の、パガニーニの演奏を初めて聴き、その驚くべき超絶技巧に衝撃を受けました。自らもピアノのパガニーニになるべくことを目標に、「怒りにも似た激しい情熱をもって」指の練習をひたすらにやり直します。加えて、聖書、文学、哲学書もむさぼり読み、バッハ、ベートーヴェンなどの作品も研究しました。技術面のみならず、内面も豊かにしながら、表現のレベルアップをしたのです。そして超絶技巧を武器に、リストはピアニストとして音楽界を席巻します。「指が 6 本あるのでは」と思わせるほどのテクニックと、どんな曲でも初見で弾

けるといわれた、演奏能力の高さは伝説となっています。また、容姿端麗であったリストはステージでの華麗な姿に熱狂して失神するご婦人までいたといいますから、まさにスーパースターで、その熱狂振りは、「リストマニア」と呼ばれました。そのような一連の演奏活動から、リストは自分のスタイルを確立していきます。当時はいろいろな聴衆を満足されるため、ひとつの演奏の中でさまざまなジャンルの作品が複数の演奏家によって演奏されるのが普通でしたが、リストは最初から最後まで一人で演奏する「リサイタル」という形式に挑戦したのです。それは西洋音楽史上、初めてのことでした。加えて、全て暗譜で演奏したり（これは一説にはクララ　シューマン＝ロバート　シューマン夫人が最初ともあります)、ピアノの蓋を開けて弾くこと、ピアノの高音部を客席側にして真横に置くようになったのも、全て、リスト以来、「常識」となったのです。何より、音楽会といえば、オーケストラとの共演が普通だったのに対し、リストはピアノを、そしてピアニストを主役としました。まさにリストは現在の演奏会のスタイルを確立した音楽家なのです。

そのようなリストが、最高峰のピアニストとしてのプライドをかけ、一つ年下の名ピアニスト、ジギスムント・ターベルクとの直接対決に挑みました。丁度、リストがパリを離れているとき、ターベルクがパリに滞在し、センセーショナルな話題を巻き起こしていました。その、噂を聞き、パリピアノ界での自分の地位が脅かされると思ったリストは、急いでパリに戻り、ある、チャリティーコンサートで二人は競演を果たすのです。「象牙の闘い」と呼ばれるこの一騎打ちは、コンサートの主催者による「ターベルクは世界一のピアニスト、リストは唯一のピアニスト」と言葉でまるく収めされました。後にリストは言っています。「ピアノは私の言葉であり、人生であり、かけがいのない親友である」と。
リストには、その生涯に大きな影響を与えた愛人が二人います。一人はマリー・ダグー伯爵夫人。10 年間、リストと同棲を続け、その後、破局を迎えます。二人の間には娘、コージマが生まれています。コージマは、後に指揮者のハンス・フォン・ビューロー、そして後に大作曲家ワーグナーの妻となります。もう一人はフォン・ザイン＝ヴィトゲンシュタイン侯爵夫人、カロリーネ。リストは 50 歳でカロリーネとの結婚を望みますが、カロリーネと侯爵の離婚がヴァチカンで認められず、失意のカロリーネは修道院へ。さらにリスト本人も僧籍に入ってしまいます。スーパースターから神父へ。作風はぐっと内省的なものに変化をします。

74 年という生涯において、リストがピアノを学んだのはツェルニー（ツェルニー練習曲集で有名）ただ一人でした。それに対して、リストが教えた弟子は 400 人あまり。特に晩年はヨーロッパ内のみならず、アメリカ、ロシア、トルコから若きピアニストが学びにくるようになり、リストは大勢の弟子のために多くの時間と精力を費やすことになります。教育者としてのリストで特筆すべき点はどんな場合でも無償でレッスンを行ったということです。最晩年のリストは光栄に包まれ、生誕、75 周年を記念する催しがヨーロッパ各地で開かれ、その多くが過去への賞賛だったとしても、喝采をあびたのです。しかし、休む間のない移動で体力は限界にきていたのでしょう。1886 年 7 月 31 日、娘、コージマのいるバイロイトで、リストは 74 年の生涯を終えるのです。

今日も私は「愛の夢」を弾きながら、当時の音楽家としては長い生涯を送ったリスト、人を愛し続けたリスト、人に奉仕をし続けたリスト、素晴らしい音楽を作曲したリスト、への思いが駆け巡ります。

七匹のかわず

池町　ルイ子

わたしは七人きょうだいの末っ子だ。英国流には何歳になってもベビー・シスターと呼ばれることになる。親、きょうだいに甘やかされて育つ幸せな末っ子もあるようだが、私の場合は違った。

母の２３回忌と、一年早いのだが父の５０回忌を一緒にすることになった。頼んでおいたミニキャブでヒースロー空港に向かった。「もうこんな重い荷物を持って旅行するのはこれを最後としたいものだ」と思いながら外の景色に視点を移す。緑の土手に水仙が群がって咲いている。二月末にしては暖かい日が続いていた。スーツケースの内は、ほとんどが本だった。ここ数年を費やしてまとめた先祖由来の小冊子である。両親の法事の仏前にそれを供えて八百年にさかのぼる先祖さんの供養にしたい。わたしはこう願っていた。

法事は生家で行われた。他の壇家の葬式があると言うことでお寺は使えなかった。やがて若い伴僧が一人で来て、読経が始まった。「正信げ」になったら、きょうだいの中にはお坊さんについて口ずさむ者もあった。その声はすぐ途絶えた。若い伴僧の読経のメロデーがポップ調なのでついていけなかったのである。線香の煙がたちのぼり、焼香のにおいがただよった。力のこもった拍子木の音が、狭い座敷に行き場を失って、わたし達の鼓膜を痛いほどつきさした。こうして法要は終わり、寿司屋の二階で会食することになった。

わたしの生家は北海道の共和町にある。三つの村が合併してできた町なので、市街らしいところは少ない。やはり農村である。生家は隣の岩内町に近い。この町は明治の三十年代には、鰊の千石場だった。春には脂の乗った鰊をよく食べさせてもらった。数の子は一緒に焼いて食べた。白子は乾燥しておいて、路傍にふきが生えると母はそれを刈ってきて一緒に煮物をつくった。夏は、皮の赤黒いやりいかだ。刺身にすると歯ごたえがあって甘味が口に広まる。今日の会食の膳は、そのような庶民的な料理ではない。都会の料亭に引け目をとらないような豪華なものだ。「これは、家を継いでいる下の甥がオーダーしたものだな・・・」ベビー・シスターはそんなことを思いながらお吸い物のふたを取る。

長兄はけちな根性の持ち主で、このような大振舞のできるような男ではない。父が亡くなってから彼は、なぜか気をいらだたせ、癇癪を起こすことが多かった。兄弟げんかはいつも長兄対誰かであった。取っ組み合い、殴り合った兄達は、そのつど気分が晴れたであろう。だが、殴られっぱなしのわたしの心は深い傷で今でも疼いている。

あるとき農協の生活用品の注文書をわたしが書き込んだ。数日後に届いた物は注文した品物とは別の物が入っていた。「おまえの注文のしかたが悪いからだ！岩宇の最高学府をだしてやったのに、このざまはなんだ！」言うのと同時に、兄の大きいげんこつが幾つも頭にあたった。彼は体格が良かった。目を剥いて寺門に立っている仁王のような形相だった。「よし、これ以上は我慢できない。家出しょう」二階の自分の部屋へ行った。頭が異常に熱かった。ほてっている。両手を髪にさし込んでみた。頭中にたんこぶができていた。怒りのため血管が破れそうだった。涙が止めどもなく流れ出た。

岩宇というのは岩内郡と古宇郡のことで、その最高学府というのが道立岩内高等学校のことである。地図でも出して見ないと見当もつかないような片田舎だ。積丹半島が親指を突き立てたように日本海に飛び出している。その付根に岩内町があり、共和町の平野が広がっている。反対側の小樽市を含めて、ニセコ積丹小樽海岸国定公園をなしている。兄は古宇郡のいそ舟漁夫の娘と結婚した。岩宇と言うのは、

ようするに長兄の世界なのである。

中学生のころ何度か高校進学調査があった。そんなある日、担任教師から父あての手紙を預かった。「なんだろう・・・」と不安な気持ちで下校した。「そうか」少し間を置いて、「兄にあげてもらえや」と、父はその手紙を読み終わって言った。父はその後、間もなく他界した。この言葉が遺言のようになった。「義務教育でないんだから、やめてしまえ」長兄は敵意のこもった言葉つきで三年間のあいだに何度も繰り返して当り散らした。

とにかく、昭和三十二年の春、わたしは高校を卒業することができた。家出してからしばらくは家族に住所を知らせなかった。札幌で就職して落着いたら、母が心配しているだろうと気になってきた。長兄との不愉快な関係から、そう言う母娘の気持まで犠牲にするのは大人気ない気がした。思いなおして年末年始の休暇に帰郷するようにしていた。そんなある正月、「おばちゃん、僕の部屋に入らないでね」上の甥は念を押して出かけた。「僕の部屋」と言うのは元はわたしの部屋だった。わたしの留守中にしょっちゅう入って、ごみ箱のはてまでかき回して、「おばちゃん、僕にガムくれないでかんだ・・」であった。「それなのに、よくも言えたものだ・・」入って下さいと言う招待を受けたような気持で懐かしい部屋のドアを開けた。彼の秘密を探るのに時間はかからなかった。本箱のすみから交換日記が出てきた。ある日付で彼のガールフレンドはこう書いている。「今月メンスが遅れているの・・・もしかして妊娠したんでないかしら・・・」彼らはまだ高校生で、同級生同士だった。彼も岩宇の最高学府を終えると、札幌に出て就職した。そうして別の女性との出会いがあった。彼が深入りするのに気付いた同級生の女性は焦燥を感じ、結婚を急いだ。結婚式の日取りも決まって、招待状は発送された。その後で、身ごもっていた別の女性は自殺してしまった。当然ながら結婚式は取りやめになり、破談になった。このドラマティックなスキャンダルは岩宇の隅々まで広まっていったのである。

そのころ、わたしはすでに渡英していたので詳細を語ることはできない。机が二つ入った小さい事務所を借りて、旅行会社を始めたばかりだった。ある日、若い女性が事務所へ来た。彼女は岩内町出身だと言った。わたしの兄の紹介状だと言って封筒を机に置いて、彼女の父親とわたしの兄が親しくしている、と話しを続けた。そうして彼女は問題の甥と高校で同級生だった、と、なんとかコネをつけようとしている。それは逆効果と言うものだ。「ここまで身内の恥を持ち込まないで下さい。お引取りください」わたしは立ち上がって、厳しい口調できっぱりと言った。

家を出て、まだ満足できなくて母国を出た。こうすることによって、一切のきずなを断ち、馴れ合いの生活から自分を遮断したつもりであった。こともあろうに、甥の出来事の顛末をよく知り、野次馬根性で話し合ったであろう人間と、ロンドンで顔を会わせた不愉快さは形容しがたいものであった。兄の無神経なことに加えて、この同郷の女性の厚かましさとで、不愉快な表情は露骨に自分の顔に現れる。彼女と一緒に来た男性は、彼女の夫でわたしの家に二人で泊まりたいと言うのである。

兄嫁のこの甥に対するえこひいきは大変なものであった。長兄も同様で弟や妹にはとげのある横柄な物言いをするが、この息子には機嫌をそこねないように心をつかっている。このような親に付け込んで、彼は我がまま放題をしている。あの出来事があった後、どういう風の吹き回しがあったのか、二、三年たって、彼らはもとのさやにおさまって結婚した。しかし、結婚後も甥の女性問題は絶えなかった。彼は家族を犠牲にして、両親の経済的サポートを受けながら女遊びの快楽にふけていた。相次ぐスキャンダルのため、甥は親戚筋の中から孤立していった。今日の法事に彼は嫁さんと一緒に出席することになっていた。甥の妻はその直前に入院した。検診の結果が昨日でた。ガンの末期である。このことがみんなの気持を暗くして会食は盛り上がらなかった。

家族が集うとよく出る話がいくつかある。その一つに下のきょうだい三人の共謀事件がある。次兄と三番目の兄の間で、母が大切に使っている砂糖を盗む計画がたてられた。当時、食糧管理下に置かれて、砂糖は配給制だった。次兄がベビー・シスターに命令した。「おい、おまえは外に出て見張れ。誰か帰って来そうだったらすぐに知らせるんだぞ」家は畑と田んぼの中間に建てられている。田の草取りをしている両親と上の方のきょうだいが、

四つんばいになって働いている姿を遠くに見下ろしながらわたしは立っていた。しばらくして兄達が出て来て、「ほら、これ　おまえの分だ」と、ちり紙に包んだわずかの砂糖をくれた。その分け前にわたしは不満だった。文句を言っても勝目はない。三番目の兄とでも五歳の差がある。「これは、かあちゃんに言おう」盗賊の仲間割れである。「よしよし、おまえから聞いた、とは言わんから心配するな」と、母は言った。次の砂糖泥棒が決行されることになった。このとき、ベビー・シスターは見張りの命令を受けなかった。家族は遠くに行ったらしい。次兄が砂糖つぼの蓋を取った。「あれ！　俺こんな字、書けないや」と言って、そっと蓋を元に戻した。何度も語られるうちに、その字が「寿」という草書の文字だったことを知った。

今日は三番目の兄だけが出席できなかった。彼は二十年前に脳梗塞で倒れ、体が不自由になっている。この兄が元気なころは、次兄と相撲を取った話がよく出た。昔、田んぼの土壌改良のため、畑の土を田んぼに運ぶ「客土」という冬の作業があった。その土取り場が格好の土俵となった。ベビー・シスターは、うちわ持たされて行司をしなければならなかった。「はっけよい！　のこった。のこった。」当時の両横綱の名前はすっかり忘れてしまった。「００山の勝ち・・」「XX 海の負け・・」とうちわの軍配は高々と負けた側にもあげられた。今回も次兄が話し出したが誰も興にのる者はなかった。みんな老いて笑いを忘れたかのようにだまり込んではしを運んでいる。次兄が一番元気で、血色のいい顔をベビー・シスターに向けてからんでくる。「なんだ、偉そうに。駅前でチラシをまくみたいに・・」と、先祖さんの小冊子を受け取らなかった。

当家の過去帖筆頭の先祖さんが１１９２年に書いた毛筆の文書は、じつに達筆なものである。解読にずいぶん苦労した。その後の先祖さんもみんな美しい筆跡を残している。感激のあまり古文書のコピーを何度もなでながら読んだ。その末えいにあたる次兄がどんな字を書くのか、わたしは見たことがない。次兄の一粒種の息子は職もなく二階の部屋にとじこもっている。この甥のことは、なぜかたずねることを控えねばならないような気がして、わたしは口にしたことがない。

日本に着いてから一冊の雑誌を買った。それを読みながら旅をしていたら、ある記事に吸い込まれるように一気に読み終えた。わたしの甥のような人間がまだいるのだ。「引きこもり」と呼ばれている。驚きと同時に「甥だけではないのだ」と、安堵感が湧き上がってきた。わたしの兄弟の時代には、人間としての最低限のプライドを保ち、能力に応じた生活の場があった。彼らの子供や孫の代には、そんな場がじょじょに狭まってきた。

三人の兄の上に三人の姉がいる。一番上の姉とわたしは２０歳違いだ。姉達と一緒に住んでいた記憶は少ない。二番目と三番目の姉は長男と結婚したので大家族のなかへ入っていった。盆、正月に里帰りさせてもらうのが唯一の楽しみのようであった。正月にはこの二人が子供をつれて何日か泊まっていった。彼女らの好きだった食べ物を母は作って待った。娘達の愚痴を母は黙って聞いてやっていた。大概は舅さんや姑さんの悪口であった。生家と嫁家のごく小さい世界の出来事が彼女達のすべてで、夫の両親の圧力が苦労と言えば気苦労の人生である。先に生まれたと言うだけで兄や姉には、弟妹をおさえつける権威があるのだから、夫の親にはどれだけの権威があるのか・・・と、言うことである。彼女達が姑に立場になったとき、惜しげもなくその偉大なる権威を放棄してしまった。妥協案は「息子の家族とは同じ屋根の下で暮らす。食事は別にする。お互いに干渉しあわない」で

ある。見て見ぬふりをして暮らすフラストレーションのはけ口は、以前と少しも変らない姑さんの悪口だ。姑さんはもうとっくの昔に亡くなっているのにである。彼女らの気持ちは低調なものだ。帰国のたびに同じ愚痴を聞かされるのが疎ましい。

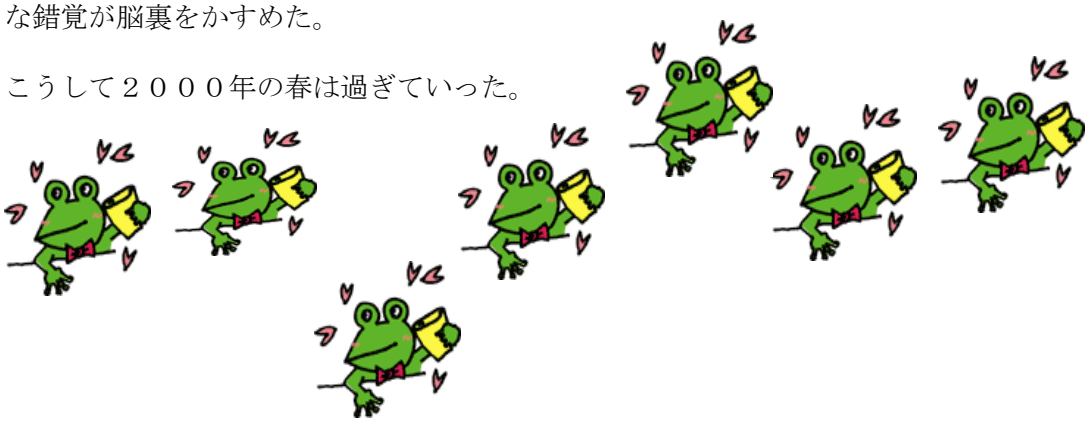
親、きょうだいは自分で選択できるものではない。だがそれ以後の人生は自分の意志でどうにでもなる。結婚する義務なんか無いわけである。わたしは結婚しなかった。兄嫁が法事の引出物をくばりだした。みんなは食べきれなかった料理をアルミの箱につめている。今日の法事の采配を振るった甥が、「写真　撮っとくべ」と、携帯電話で写真屋を呼んだ。その後でわたしに甥は小声で、「いや、安心したで。これで親父の葬式の写真　心配しなくてもいいもの」。小柄な一番上の姉はスカーフをかぶりながら、こんなことをつぶやいた。「良かった。あれから葬式の写真にぬいてもらえるから・・・」。彼女は８２歳で独り暮らしをしている。足を少し引きずるようにして歩くようになったが、元気なものだ。

姉達の夫は、ここ数年の間に次々と他界してしまった。上の甥は暗い表情で会食のはねるのを待っていた。集合写真を撮り終えるとすぐ母親を車に乗せて札幌へ帰っていった。彼には高校生、中学生の三人の息子がある。まだ親のサポートが必要なときだ。自分が父親に死なれたときのことを考えてひそかに心配する。下の甥夫婦の歓待を受けて、わたしは生家に泊まった。この甥は小さい時から全面的にわたしの支持者だった。長兄と口論になると、「おばちゃんの言うとおり。おばちゃんの言うとおり・・・」と父親が、「なんも分らないくせに」舌打ちしてやめるまで叫んでいた。

翌日も晴天だった。茶の間から雪化粧の山並みが朝の陽光で輝いている。右から岩内山、チセヌプリ、アンヌプリといずれも千メートルを超える山々の中間に、低めの山を交えて波状をなし、ニセコ連峰となって空を圧している。懐かしいスカイラインだ。「これとよく似た山が・・・入院してた・・・病院の窓から・・・見えた」いつの間にか長兄が後ろに立っていた。二年前彼は脳出血で入院していた。のどが裂けるような大声で怒鳴っていた彼の声はとぎれとぎれに、みぞおちに引っかかりながら出てくる。「まえより見晴らしがよくなったような気がするけど___ 」「あすこに・・・ぶなの樹が・・・何本も・・・あったの・・・覚えてるべ。そいつを・・・切ったんだ」弱々しいかさかさな声が肉の削げ落ちたのどをつたってくる。兄はタバコばかりすっている。老眼鏡にやにが付き、曇りガラスのようになっている。口を少し開けて、怒りを失った彼の視線が眼鏡越しにわたしに向けられているのを感じた。兄はときどきそうした。かつて見たこともないような表情が薄気味悪くて、自分は気付かないふりをしていた。

古井戸の底から這い出たかわずのように疲れた表情で千歳空港へ向かった。飛行機が高度をあげるにつれて意識が自分の世界にもどってくるのを感じた。最後にホテル日航成田に泊まった。レバノンを追放された日本赤軍の幹部らが成田空港に到着したニュースを見ていたら、２８年前、希望よりも不安の勝った気持で英国へ出発した日のテレビが赤軍のあさま山荘事件を報道していたのを思い出した。自分がこれから未知の英国へ出発するような錯覚が脳裏をかすめた。

こうして２０００年の春は過ぎていった。



新　生

バロウ　典子

私は階段を
一歩　一歩 登って行った
春も　夏も　秋も　冬も
うまず　たゆまずに 一日も欠かさずに
登って行った

多くの人が　落後して
すぐに後に　続く人は
見えなかった

やっと　ひとつのランディングに着いた
私は　ほっとして　下を見下ろした

その時
クラッと　めまいがして
真っ逆さまに　階段を
転げ落ちてしまった

私は激しく地べたに　打ちつけられて
粉々に　くだけてしまい
もう　立ち上がることは
出来ないと思った

地に伏したまま　仰ぎ見る高拠は
いよいよ高く はるかに遠かった
もう　近づくことは　不可能に思われた
私の身体から　離れた魂が
粉々になってしまった　私を見ていた
ああ　すべては　誰の所為でもなかった

私は　他の人より　何も優れていないのに
ただ　階段を　人より　早く登れただけで
何か　偉くなったような　気がして
人を見下げる心があったのだ

転落したのは　その所為だったと
なぜか　すぐに　わかった
私は粉々になった自分の　身体の上に
悔悟の涙を　流した
涙は止まらずに　流れた

あんまりたくさん　流れたので
そこに　涙のプールが　出来てしまった
こんなにも　たくさんの涙が
私の身体に　詰まっていたなんて
まったくの　驚きだった

かって　世の中はでたらめで
矛盾に満ちている　と　思っていた私は
そんな世の中に　巻き込まれて泣くことは
もうたくさん　と

自分だけを　守るために
心の扉を閉ざして　もの言わぬ本だけで
身の周りに　砦を築き
人の悲しみにも　悩みにも　動かされず
人の心の痛みを　分け合うこともしないで
十年もの時が　経ってしまった

ああ　涙は　溜めずに
共に抱き合って　流すべきだった
冷たい心の自分よ

気がついた時はもう遅かった
粉々になった　自分の身体の上に
溜まりに溜まった涙が　流れ続けた

心がずいぶん　軽くなったのを感じた

こんなにも　たくさんの涙が身体に
詰まっていたのだから、無理もない

粉々になった　私の身体の　一片　一片は
自分が流した涙でできた　プールの中に
少しづつ　溶けてゆき
とうとう　見えなくなった

私は　どこにいったのだろうか

幼い頃から　私は水泳が好きだった
クロールは勿論　平泳ぎ　背泳ぎ　潜水もできた
学校で　水泳の選手に選ばれた時は
母が喜んでくれた
そんなことを　思い出しながら
涙のプールを見ていた

突然　プールの真中どころから
クロールで　抜き手を切って
泳ぎ出てきた人がいた

誰　なのだろうか
よく　その人の顔を見たら
他でもない　私だった

私は嬉しくて　また　泣いてしまった
これから　新しく
生きられると思って！

“ヒト”と“トリ”の次世代早期教育

木野 悍

日本人の早期教育昨今

インタービュー記事を読んだだけの孫引きですが、『赤ちゃんの不思議・岩波新書』の著者、開（ひらき）一夫さんがこんなことをいっています。ついでながら、開さんはロボット開発から未踏の「赤ちゃん学」研究に転向した方で、すでに世界的な評価を得ているそうです。

・・・生後すぐ顔マネをし、生後五ヶ月もすれば簡単な数認識ができる、人間の赤ちゃんの能力に驚きました。生後一年で言葉を話し出すなんて、ロボットには無理ですからね・・・。一日に八時間しか起きていない赤ちゃんに教材ばかり与えるのは危険です。むしろ、親子の自然な交流こそ、本当の「早期教育」と思います。

言葉を習得する音声学習の実験では、「映像だけでは効果がなく、双方向的な会話が必要」という結論が出ています。だから講演で、「早期教育のための英語のＤＶＤに効果がない」と言うと、「じゃあネイティブの先生をつけなきゃ」って反応もあるなど、教育熱は過熱する一方（笑い）。

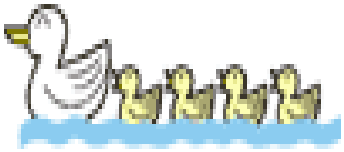
娘たちが赤ん坊のころには気づかなかった私ですが、孫たちだと観察が行き届くようで、開先生の言うことがよくわかるのです。親に似るのはＤＮＡのせいばかりではなくて、本能的な猿真似をした結果だと理解できます。

では、“ヒト”の 早期教育に話を移しましょう。まだ小学生の我が子に英語を身につけさせようと、お母さんが付き添って英国で暮らしているという話を一再ならず聞いた私ですが、開先生もこんな現象を見聞きして危機感を覚えているのでしょう。さはさりながら、ここから先を掘り下げるのはこの稿の本旨ではありませんので、ここらで「トリ」の早期教育に話を移しましょう。

カイツブリの早期教育

昨年書かせていただいたバードウォッチングの話題どおり、私は相も変わらず野鳥の観察に身を入れています。今年は、水辺に座りこんで眺めていればいいカンムリカイツブリ great crested grebe に夢中になって、２月から７月中旬まで天気さえよければ、イーリー郊外にある広い沼地に通っていました。

この鳥は春先になると色鮮やかな繁殖羽に変身して、優雅な水上求愛ダンスを始めます。話がまとまると卵を生むこと以外は、巣作り始めすべて雌雄の共同作業、したがって同類や同じ沼にいる別種の水鳥との陣取り合戦では奥さんも敢然と戦いますし、ご主人も卵を温める任務を公平に果たします。ところがそこら中にいるマガモだと、種付けを済ませた雄はその後の子育てには一切関わらないからおもしろいのです。カイツブリが公平でないのは、雛が孵ったときから親離れまでの育児ぶりです。不思議なことに雌雄それぞれがお気に入りの雛を選ぶようだし、躾の厳しさにも差がうかがわれました。このあたりは、私どもと一緒ですよ、ね。



ヒトの赤ん坊とちがって、カイツブリの雛たちは孵ったその日から泳いだり潜ったりできるのですが、大方の水鳥に共通する種保存の本能を受け継いでいるからでしょう。間もなくやれるようになるのは、開先生のいうマネの能力を大いに発揮して親のやることを一心不乱に眺め、数分後にはそれを再現してみせることです。水鳥はすべて行うことですが、汚れた羽毛を水で清めてから体脂肪を塗りつけて沈んでしまうのを防ぎます。その課程でやるのが、水か

らあがった犬にそっくりの水切り運動です。体を揺すったのはいいけれど、もののみごとに転んでしまった雛を見たときは、思わず腹を抱えてしまいました。雛の表情を拡大してみたら、きっと大不満の顔つきをしていたにちがいありません。嘘だと思ったら、意図に反して転んだ赤ん坊を助け起こす前に、顔つきを観察してみてください。一瞬ですがむかついている表情を浮かべているはず、泣くのはそれからです。後でご紹介する書籍の主人公であるスズメの子だって、「・・・大いに威厳を傷つけられた様子で、枕の下に隠れてしまった。」と、自らの失態に腹を立てている場面が描写されています。

カイツブリは魚貝が主食ですから、活き魚を食べること、いやその前に捕まえる技術が早期教育の眼目になります。孵ってからしばらくの雛たちは、親の背中に乗って移動したり食事をしたりするのですが、一週間もたたないうちに厳しい‘しつけ’の鞭を味わうことになります。その時期がくると、魚を持ち帰った親は、雛の鼻先に獲物を突きつけるだけになります。やがてスゥーッと離れいってしまい、数メートル先で咥えていた魚を水に戻してしまうのですから、私たちにはできない厳しさです。雛が教えを理解して潜るようになるにはまだ１～２週間が必要ですが、反応が鈍い雛だと、次の鞭が振るわれます。どうするかというと、当の親が捕まえてきた魚を雛の目前で呑みこんでしまうのです。

そうこうするうちに親離れの時期がくる。大きさだけは親並みになっているのにまだピヨピヨと鳴いて甘えるのですが、この時期にはいくら気に入りの子でも餌は与えません。親にしてみれば、夏が終わる前に二度でも三度でも次世代を生まなければなりません。雛にしてみたら年子どころか月子みたいな兄弟姉妹ができるのですから、かなりのショックでしょうね。卵を温めている親の脇にそっと寄り添っている雛を見たときは、「あぁ、かわいそうに」と心底思ったことです。やはり私も、「ヒト」なのですね。

“ヒト”“スズメ”を育てる

最後は、１９５３年のベストセラー書籍、『SOLD FOR A FARTHING*』から見つけた早期教育です。著者のクレア・キップス夫人は感情に走るのを抑えた控えめな筆致ながら、長期に及んだ一羽と一人の共同生活をこまやかに描写してくれました。キップスさんの住む平屋の玄関先に落ちていた不具の雛は、その日から“１２年と７週と４日**”という長い月日を夫人と共に過ごしました。間もなく始まったドイツ空軍の爆撃にさらされながら、避難してきた人々の慰問まで引き受けていたのです。“最後まで勇敢で、聡明**”だった勇者が、極度の老衰から夫人の手の中で息を引き取る場面と、墓碑銘の“クラレンス　その名もほまれ高き　いとしいスズメよ**”に涙しない読者は数少ないのではないでしょうか。

あまりに以前の本なので復刻版すらないらしいので、英語版は古本を買うしかありません。幸い日本人は、作家の梨木香歩さんが翻訳した文藝春秋刊行の『ある小さなスズメの記録』を読むことができます。昨年１１月の初版以来、版を重ねて１０万部に達したと聞き、私もたいへん嬉しくなりました。主人公への思い入れが強かったせいか、ときおり訳者の筆が滑った部分もありますが、実に読みやすい翻訳なのは読者としてありがたいことです。

前置きが長くなってしまいました。私がこの本を持ち出したのは、死ぬまで外の鳥たちとの接触を避けた小雀が、プロのピアノ演奏家だったキップスさんに影響されたのか、野の雀にはけっしてできない歌声を身につけていったという一章があるからです。生きていくがために人間の食品を口にするのは当然だし、いったん定めたねぐら（クラレンスはキップスさんのベッドの一角を巣にしていました）を守るのはDNAのもたらしたものでしょう。でもその食べものだって、著者が料理する様を観察し味見をしたから好みが定まっていったし、ピアノを操る夫人の手先にとまって耳を傾けてもいたからこそ、第３章「音楽家としての生活」に書かれた声楽家クラレンスに成長していったのではないでしょうか。

この作品もまた、「赤ちゃんと親の自然な交流がない」とする開先生の観察に同調する内容と感じる私がおかしいのでしょうか？

注記　* 聖書の一節をとった原本のタイトルですが、私は「１ペンスで２羽も買える雀でさえ、主は１羽たりとも地に落ちることを許しません」という意味だと考えています。
** すべて、日本語版の表現を引用しました。

旅　時と人との出会い

岡村照子

自宅のＴＶでアラブ諸国蜂起のニュースが続いた後、目に留まったのがメルケル首相の姿であった。
今日２０１１年８月１３日は、東ドイツによりベルリンを東と西に隔てるベルリンの壁が作られてから５０年の日、西に逃れようとして亡くなられた多くの犠牲者の為の追悼式典の場面であった。これを見ながら私の脳裏に浮かんだのは、１９８９年１１月、東京のＴＶで見たベルリンの壁の上で真夜中まで喜びに騒いでいる若者たちの姿であった。初めは何に喜んでいるのかが分からなかったが、それはベルリンの壁の崩壊の場面であった。そして私はこれで「平和な世界が訪れると」と喜んだ。

又、１９８９年６月天安門事件発生により、東京の職場で、会社命令により慌ただしく一時帰国してきた北京駐在の同僚たちの緊張した面持ちの顔、中国政府により民主化を求めた学生達を中心に３千人が殺されたといわれる事件で、これで民主化も遠のいてしまったと、がっかりした気持ちも思い出された。その後、仕事に生活にと慌ただしく、それらの事柄は何か遠くの出来事と感じて過ごしてきた。

やっと時間に余裕が出来た 2005 年、以前は遠くに感じていた事柄を、直接身近に観て実感したいと思い、期待に胸を弾ませてロンドンにやって来た。

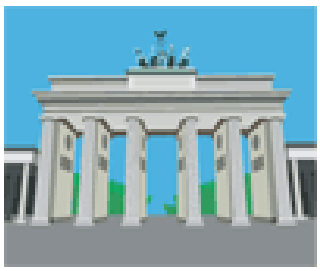
２００６年ハンガリーの旅（マーチャーシュ教会）
２００６年１１月初め　私達はリンツ、ウイーンを見て回りハンガリー東駅に列車で到着した。雨が降りバスが運転されてなかったので、やっと捕まえたホテル迄のタクシーの車中で、運転手から最近若者のデモのせいで交通が乱れていると、愚痴を聞いた。そう言えば、出かける前に報道されていた「内閣の虚偽決算報告に怒った若者達のデモ」が当日も続いて居たようであった。

翌日曜日のミサに、ブダの丘の上にあるマーチャーシュ教会に出かけた。この教会はハンガリー人にはシンボル的存在で、内部は広く立派で、１６世紀中頃から１５０年間オスマントルコに占領された際、モスクに改装されたが為に柱の模様などに、わずかにその跡が見受けられるが、現在ではカソリックの教会として市民に親しまれている。入場してみると、ＴＶカメラと数人の関係者、クワイアーの指導者による讃美歌の練習が行われていて、聖職者の姿、きちんとした身なりの多くの人達で席は埋まっていた。ミサの終わりに全員が起立して、背を正して厳粛なる面持ちで、普段は歌われない国歌を声高に歌い始め、そ

れは荘厳な響きであった。後で売店の女性に尋ねると、今日は「ハンガリー蜂起」から５０周年のメモリアルミサであると誇らしげに話してくれた。

１９５６年１１月４日ソビエト連邦の権威と支配に対するブタペスト市民の蜂起は全国的規模に達したが、２週間の抵抗にも拘らずソビエト軍により鎮圧され、市民死傷者の数は数千人にも達した。ハンガリー国民はこの５０年前の犠牲と勇気を讃えて、メモリアルミサを行ったのでであった。然しながら、現在の若者達のデモは、この国が必ずしも順調で無い様に思われ複雑な気持ちにさせられたが、この危機を乗り越えて欲しいと思った。

２００７年９月ベルリンの旅(ベルリンの壁)



プラハを経由してベルリンに入ったが､ベルリン中央駅は新しくなり、駅前広場も新ビルの建設など再開発中、又、私達の宿泊した東ベルリンに位置していたアレクサンダープラッツ駅付近も大改装の最中だった。東西分裂時代は通り抜ける事が出来なかったブランデンブルグ門では､多くの旅行者たちが記念撮影をしていた。ベルリンの壁を行来する人達の為に作られた国境検問所(チェックポイントチャーリー)は道を狭くジグザグにして、通り抜けるのを難しくしていた。東西分裂の厳しさが感じられた。ベルリンの壁の建設・崩壊、東西冷戦の終結と歴史の荒波を逞しく越えてきたドイツ国民はEU内でもユーロ最強国として信頼されているが、若者の右翼化、移民問題など難しい問題も抱えているが、ＥＵ内の牽引者として期待したいと思う。

２００８年１０月マルタの旅（聖ヨハネ大聖堂）
マルタ島は、聖ヨハネ騎士団の島とも言える。キリスト教国の西洋とイスラム教国の対立するなかで、最前線で働いた聖ヨハネ騎士団（マルタ騎士団）は、マルタ島を堅牢な要塞都市にして、スレイマン１世大帝によるイスラム軍の攻略、大包囲をついに守り抜き、イスラム勢力に押され気味であったキリスト教国より拍手喝采を受けた島である。又、マルタは１９８９年、ブッシュ、ゴルバチョフの米ソ冷戦終結調印がなされた場所でもある。

私たちはマルタに着くと､翌日の日曜日マルタ騎士団の修道院として使われていた聖ヨハネ大聖堂に出かけた。豪華な内装の聖堂内でミサの始まりを待っていると、１０名程のグループが聖職者に導かれて中央最前列に座った。その中の一人が元ポーランド連帯の議長ワレサであった。ミサのなかで、司教の「今日は連帯ワレサ氏がいらしている。私達の教皇ヨハネ・パウロ２世とワレサ氏が連絡を取りながらポーランドの民主化を進め、東西の平和に貢献した。現在は再び難しい時期となっているが、これからも皆で協力して、平和を実現していこう」との説教が思い起こされ、勇気づけられた気持ちがした。ワレサ氏退場の時、親しみある笑顔と握手したがっしりした手がとても暖かく、思わぬ幸運に舞い上がる思いであった。

沢山の書籍、映画、ニュース、ＴＶ等が東西冷戦を題材として取り上げてきたが、振り返ってみると、私達の世代はこのような時代背景の中で成長してきたのだと思った。

ロンドンにやって来て、旅行で色々の町を訪れ、幾つかの場所を実際に尋ねて行くと、私の心の中のかすかな幾つかの点が、立体的に繋がり、姿、形として理解出来る時がある。そして「歴史に立ち会ったような気分」にさせてくれる、この大きな喜びが旅の良さなのかもしれない。

バカにつける薬

高階玲子

イギリスの長者番付「リッチ・リスト」が、今年も４月末に発表された。

これは、日曜紙「サンデー・タイムズ」が毎年独自に行なっている調査で、１９８９年から始まった。
別冊特集、１４０ページ。億万長者トップ１０００人に関して、２００６年１月現在の所得、土地、家屋敷、競走馬、アート、株など、新聞社が可能な限り把握した資料を駆使して資産を総合的に計上したもので、預金などは非公開なので入っていないという。
このリストによると、イギリスで現在最もリッチなのは、鉄鋼業界で世界第二位を誇る企業のオーナーで、ロンドンに住んでいるインド人。資産１４８億ポンド（３兆円・・・この桁になると計算が妖しくなるけれど、間違っていませんよ、ね？）となっているが、本人はそれ以上と言っているそうだ。
二位は、ロシアの石油王と言われるアブラモビッチ氏。イングランドのサッカー・プレミア・リーグで２年連続首位に輝いたチェルシーのオーナー、と言った方がお馴染みかも。
そして三位に、ロンドンに広大な土地を持つウェストミンスター公爵とリストは続く。
トップ１０００人の他に、「３０歳以下のヤング・リッチ１００人」を始め、「女性リッチ・リスト」「急上昇したリッチ」など、いろいろな切り口が掲載されているが、あまりにも庶民の生活とかけ離れた話で、ため息も出ない。
しかしその背景を読んだり、友人と話をしたりしているうちに、これは自分に関係のない話ではないと気が付いた。多くの識者が一貫して指摘しているのが、ブレア政権になってから、リッチな人はますますリッチに、しかも急カーブの右肩上がりになっているという点である。これが「労働党」政権の政治と言えるか。これがブレアの言った「第三の道」の正体か。「この拝金主義の傾向に待ったをかけないと、イギリス社会は崩壊する」と警告するコラムもある。
時を同じくして日本でも、小泉政権の総括を視野に入れたアンケートや記事が出始めた。こちらも一言で言えば、「広がる格差社会」だ。もとより、勤勉な労働の対価として資産を増やすことには何の異存もないが、さまざまな政策の結果として大企業やお金持ちが優遇されているのは納得が行かない。一例を挙げれば、税制がある。
所得税はかつて最高税率が７５％だったが、今は３５％、半分以下である。法人税はピーク時の４３．３％が現在３０％。「この１０年あまりの間に、持てる者に手厚くし、そうでない者は置き去りにするような税制改革が一貫して行なわれてきた」（雑誌「世界」５月号）
その上、みんなが一律に支払う消費税が上がるとしたら・・・？
税金は社会を運営する必要経費だから、負担できる人が応分に負担すべきで、貧しい人たちにしわ寄せが行くのはおかしい。
ブレアもコイズミも民意で選ばれたはずなのに、圧倒的多数の「非リッチ」が格差を助長する政策を肯定しているのは何故なのだろうか。
モヤモヤとつぶやいていたら、友人が言った。

「世の中、利口とバカと、どちらが多いと思いますか？」
ウーン、私も利口とは言えないから、「バカの方が多いかも、ねえ」
「そう、あなたのように自分はバカと認識している人も多いし、自分以外はみんなバカと思っている人も多い。結局バカが多いのです。で、民主主義というのは多数決が原則で、
バカはバカだから、バカに不利な政策を行なう人にも何の疑問も持たずに投票してしまう。だからこういう世の中になるのです」
なるほど・・・と頷きそうになりながら、ちょっと待てよ、と踏みとどまる。
バカにつける薬は、ほんとうに、無いのだろうか。

英国春秋あれこれ

ケンもホロロに断られ

小川　のり子

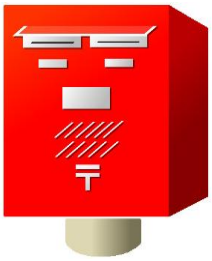
前号で英語を話す苦労話を書いたが、今回は“不思議な日本語”について書いてみたい。

日頃何気なく話している言葉にも、口から出てくるまま出所知らずで使っているのが**ワンサカ**とある。この“たくさん”を意味するワンサカもしかりで、一体、ワンサカは何処から来ているのか？国語辞典には俗語として“わんさ”があり、物がたくさんある（集まってくる）様子とある。“わんさ”に“か”が加えられ、響きを軽快にしたのだろうが、残念ながらその語源は不明。どなたかご存知の方がおられるだろうか。

「友人に借金を頼んだら、**ケンもホロロ**に断られたよ」
これは相手にされない、一蹴されることだが、ケンもホロロも雉の鳴き声から来ているそうだ。それもたった一声、“ケン・ホロロ”とあっさりしたもの。ダメなものは何度言ってもダメというところか。

「彼女はＩＱが１５６だそうだが、そんなことは**おくび**にも出さないね。それにすべてに**そつがない**よ。」
素振りもみせないことだが、おくびとはゲップのこと。誰にでもある自然現象の兆候さえ見せないなんてやはり知能指数が高い証拠か？そつがないは、失敗や無駄がないことだが「失」が「損」に変化したとかで、損がないこと。

「さっきから黙っているけど、**ウンとかスンとか言ったら**どう！」
家庭内で、聞きなれた、または言いなれたセリフだろうが、これはポルトガル語のカルタの札からきているそうである。ウンが一点、スンが十点で、一から十までのこと。ここから始終、全くの意味になったとか。でももう一つピンと来ない説明。



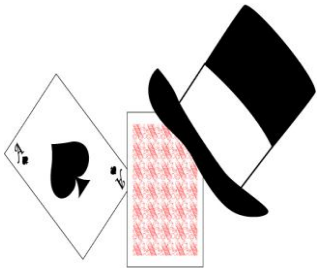
他にウン・スンに関して、面白い話がある。
上京して学生生活を送っている息子に、母親が毎月送金をしているが、彼からは便りはおろか礼状一本送ってこない。そこで業を煮やした母親が、「金が着いたかどうかの返事もくれず、お前が元気かどうかもわからない。一度くらいウンとかスンとか言って寄越したら」と書き送った。数日して息子から封書が届いた。彼女が期待に胸をふくらませて開いてみると、一枚の便箋に“ウン”と“スン”の文字が大書してあったそうだ。

「外国旅行はしてみたいと思うが、何しろ彼らの言葉は私には**チンプンカンプン**で・・」
わけのわからない言葉の意だが、当て字で珍粉漢粉（又は陳粉漢粉）と表記するそうだ。広辞苑では、もと儒者の用いた漢語をひやかした語に始まるとも、また、長崎の人が紅毛人の語のわからないことから言い始めたともいう・・とある。しかし別のソースでは中国語の聞いてもわからないという意味の「チンプトン」、見ても分らないという意味の「カンプトン」が一つとなって、「チンプンカンプン」になったと書かれている。

こうして書き出して行くと「本当！？」という言葉が次から次に飛び出してくる。その中でも特に仏教語に由来したものをここにいくつか拾い上げてみたい。

「引導を渡す」
引導とは“人を導いて仏門にいれること”と辞書にはあるが、これに“渡す”が付くと、一方的な最後通告になる用例が多い。父親は、「お前にはもうこれ以上金は出せないよ」と放蕩息子に引導を渡した。

「有頂天　（うちょうてん)」
得意満面、夢中になること。
仏教用語で人間界を支配するものに欲界、色界、無色界があり、この無色界を有頂天という。これを超越することで、悟りの境地に入ることが出来るそうだが、悟りの境地に入れば“有頂天”になって喜べないから、人生、退屈にならないのだろうか。



「虚仮（こけ）にされる」
バカにされる、ないがしろにされるの意だが、仏教用語で虚仮とは、内心と実際の言行が一致しないこと。しかしこの語は、何故か猿の形容にも使われ、“コケ猿”とはバカなサル、年寄りサル、仲間はずれにされたサルとある。

「金輪際　（こんりんざい）　」
絶対にありえないこと。少し長くなるが、仏界ではその中心に須彌山があり（高さ千三百万キロ)、その外周に同じ深さの海があり、さらにそれを巡って七重の山、その周りにまた深い海があり、その海の周囲を二重の山、それらを支えている厚い層が土輪。この下のさらなる層が金輪。この二つの層が接するところが“金輪際”で永久不動＝絶対であるそうな。「ああ、こんな長たらしい文は金輪際読みたくない」なんて言いたくなる。

「娑婆　（しゃば)」
誘惑、苦痛、束縛の多い人間界。俗界。忍の意の梵語“saha”の音訳
今まで、刺青のお兄ぃさん達の言葉と思っていたが、「シャバの空気は冷たくて、刑務所暮らしが懐かしい・・・」なんてことはないはずだが。

「ゲンが悪い」
験（ゲン）はこれからしようとすることのよしあしを示すような出来事。縁起を担ぐ事。仏教の加持祈祷の効き目（効験）は吉兆占い、神頼みで、のちに縁起担ぎに。
「おばあちゃん、死ぬなんてそんなゲンの悪いことは言わないで！」といい続けた娘が、先に逝ってしまった例を知っている。

「金縛り」
身動きがとれないこと。本来文字通り金属の鎖で縛られること。これは仏教用語で「金縛（きんばく)」と言うそうだが、悪霊を調伏するための手法。今の世で金縛りの術を簡単に人に施せるのは、金貸し業だろうか。

調子に乗って書き出したら果てしなく出てくる。もう、しんどくなったので、この辺で終わりにしよう。しかし、もう一つ最後に“しんどい”、(疲れた）は、大阪弁ではないそうだ。関西生まれの関西育ちの私が、半世紀以上も大阪弁と信じ、何かにつけ「しんどい、しんどい」を連発していたのに・・・である。広辞苑では“関西方言”、「心労」の転か、とあるが、別の本では、もとは“辛労、心労”で共に和製漢語。だから辛く疲れる、心が痛むのしんどいは必ずしも関西弁ではないとある。

「新任の首相に北方領土返還の交渉は、こりゃーしんどい話だ」と言えば、難しい、大変と言うより“もっと”“それ以上に”が強調されるような気がする。

『英国春秋』２０１１年秋号（Ｎｏ．１９）
編集人　小川のり子
発行人　佐野圭作
発行所　英国日本人会
事務局　c/o ita-net ltd.
37 Eyre Street Hill
London EC1R 5ET

原稿の送り先
ogawa@japanassociation.org.uk 又は
Mrs. M Hodgson
492 Canterbury Way, Herts. SG1 4ED